

地域学研究会第 10 回大会報告：地域課題と知のクロス 「地域をえがく—想像力としての地域学」

基調講演：柴崎友香*

シンポジウム：蛇谷りえ**・福田修三***・佐藤紘一****・佐々木孝文*****

村田周祐*****・稲津秀樹*****

The 10th Annual Meeting of the Tottori University Association for Regional Sciences
“On Depicting the Region: The Imaginative Potential of Regional Sciences”

SHIBASAKI Tomoka*, JATANI Rie**, FUKUTA Shuzou***, SATOU Koichi****,
SASAKI Takafumi*****, MURATA Shusuke*****, INAZU Hideki*****

キーワード：地域学, 小説, 私, 街のできごと

Keywords: Regional Sciences, Novels, Self, Local Occurrences

I. 開会

開会挨拶

山根 俊喜（地域学研究会会長・地域学部長）

山根でございます。よろしく申し上げます。今日は、私ども地域学部の教員で組織しております地域学研究会の大会においていただきまして、ありがとうございます。今回は 10 回目ということで、節目に当たる年です。お知らせにありますように、「地域をえがく—想像力としての地域学」をテーマとして、基調講演に小説家の柴崎友香さん、シンポジウムの登壇者として、鳥取の地でこのテーマにかかわりのある、創造的な取り組みをなさっている方々、蛇谷りえさん、それから佐藤紘一さん、福田修三さん、佐々木孝文さんをお招きしてこのテーマを深めていくことを企画しました。

柴崎さん、それからシンポジストの皆様、そしてこの後、御挨拶いただきます広瀬鳥取県地域づくり推進部長、それから中島鳥取大学長にはお忙しい中、私どもの企画に参加していただきまして、本当にありがとうございます。

私たちが目指す地域学の課題というのは、大まかに言えば、地域における人々の公共性を再構築して新しい公共空間をつくっていくことなのですが、これを日常の言葉で「つながりを取り戻す」と表現してきました。いかにすれば「つながりを取り戻す」ことができるのかという課題を追究しているということになるのだと思います。他者とつながって、他者とともに幸福に生きるためには、相互性とか共感能力とかそういうものが必要になるわけですが、そういうものの根底にあるというか、それを支えているのが想像力だと考えられます。

* 小説家

** 合同会社うかぶ LLC 共同代表

*** 株式会社インテリアフクタ会長

**** 鳥取県立図書館郷土資料課学芸員

***** 鳥取市教育委員会文化財課課長補佐

***** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・准教授

それで、今回のテーマになったわけです。想像力という、私たちの世代だとビートルズの「イメージ」がぱっと思い浮かぶのですが、あのような感じでイメージすると僕なんかはびんとくるなと思います。詳しい大会の趣旨については、この後の趣旨説明のほうでさせていただきますけれども、今回はこの想像力と想像力を媒介にして地域を等身大のものとして描く方法の重要性とか、そうした表現を媒介にして充実した生活を紡ぎ出して地域を創造していく方法を皆さんとともに考え、深めていけたらと思っています。

簡単ですけども、これをもって開会の挨拶とさせていただきます。本日は一日長いですが、一緒に考えていけたらと思っていますので、よろしくをお願いします。



山根俊樹氏

学長挨拶

中嶋 廣光（鳥取大学学長）

皆さん、おはようございます。学長の中島でございます。本日は、ご参加いただきましてまことにありがとうございます。

まずは、第10回という節目の会にあたり、これまでご努力とご尽力いただいた先生方に対して、心からの敬意と謝意と、それから祝意をあらわしたいと思います。

この研究会の舞台となっている地域学部ですが、今から15年前、平成16年に誕生しました。平成16年は、鳥取大学が法人化して、国立大学法人になった年でもあります。この地域学部の母体というのは、ちょうど70年前に鳥取大学が創立されたときに、設立された学芸学部となります。その学芸学部が教育学部に名前を変え、さらに教育地域科学部となり、平成16年に、日本で初めての地域学部が誕生しました。誕生した当初は、本当に地域学というのは、皆さんによく理解されていなくて、地域学と

はどんな学問分野であるとか、地域学部に行ったらどんなことを学べるのか、あるいは地域学部の先生はどんな研究をしているのか、よく分からなかったものです。これは学外だけではなくて、学内でもあまり理解を得られていなかったということです。その地域学部の先生方は、それぞれの専門分野において、常に地域を頭に入れながら研究を展開されてきました。ただ、学問になりますと、やはり体系化ということがどうしても必要になってきます。そうすると、ばらばらにやっても仕方がないということで、相当苦勞されたと思います。そういった意味で、この15年間というのは、地域学部の先生方は、いかに地域学というものを体系化していくかということと、それから地域学というものを知ってもらおうかということで、本当に苦勞され工夫しながら、日本の先頭を切って走ってこられた15年間だったと思います。

地域学の研究といいますと、私は素人でよく分からないのですが、一般に地域の課題を見つけて、それを分析して、それをどうやって解決できるかということの研究することだと思っていますが、そういったことだけでも非常に難しい研究だと、ひしひしと感じています。というのは、やはり地域というのは本当に多様であり、つまりいろいろな地域があるということです。文化的にも経済的にも、いろいろな地域があります。例えば、厚生労働省のデータでは、鳥取県は、お医者さんは十分足りているというデータが示されています。しかし、これは単にお医者さんの数を人口で割っただけのものです。ところが、実際に、鳥取県は東西に広がり、高齢者も多く、さらに、山や川や谷があり、それから海もあって複雑な地形を形成しており、鳥取市や米子市には大きい病院がありますが、中山間地域から病院に通おうとしたら、交通の便が悪いわけです。そういうことを考えますと、本当に単なるデータだけではなく現場に行っているいろいろなものを見るとき、様々な方面からアプローチして考えていかないと、単純には捉えられないということが地域学研究的の難しさだと感じています。

先日、山根俊喜地域学部長が私のところに来られて、10回目の区切りの会でもあるのでぜひ学長に挨拶をとということで、地域学研究会に関する分厚い資料を渡されました。あまり説明していただかなかったのですが、よく読んでおくと、これで挨拶を考えろということだったと思います。資料を読ませていただき、今回で10回目の開催ですが、毎回毎回それぞれ担当する先生方が、苦勞・工夫され、

いかに多くの人に、地域学というものを、あるいは地域学の視点の多さというものを示せるかということをやってきたことが、よく理解できました。

例えば基調講演はこれまでの大会で、9 回行っていますが、講師の方々のうち、4 回が大学の先生であり、ある意味では地域学の専門家が講演されています。それはどちらかという、1 回目から早い回の大会で行われていました。ただ、最近、劇作家で演出家の平田オリザさんとか、作家の森まゆみさん、今回も作家の柴崎友香さんということで、それぞれの分野で活躍されている人たちから見た地域という視点を試み始めたという、これまでの経緯がよく分かりました。これはどういうことかという、地域学研究というのが、地域の多様性であるとか多面性であるとか、あるいは地域を様々な角度から見るということを表していると感じました。今回も、ここにありますように「地域をえがくー想像力としての地域学」ということで非常に興味深いテーマを設定していますので、午前中の基調講演から午後のシンポジウムまで、おもしろいストーリーが展開できるのではないかと期待しているところです。

結びになります。これまで地域学部を支えてきた先生方によって、これからの研究がますます盛んになるように、あるいは発展していくように、またこの地域学研究会の大会が今後、20 回、30 回、50 回、行く行くは 100 回と回を重ねて充実していくことを祈念して、私からの開会の挨拶とさせていただきます。

本日は、ご参加いただきましてまことにありがとうございました。



中嶋廣光氏

来賓挨拶

広瀬 龍一（鳥取県地域づくり推進部部長）

皆さん、おはようございます。ただいま御紹介をいただきました鳥取県の地域づくり推進部部長の広瀬と申します。本日は、第 10 回の記念すべき地域学研究会、本当に多くの皆さんが参加されて盛大に開催されますことを、まずもってお祝いを申し上げたいと思います。そして、先ほど学長からもございました、地域学部が 15 周年、そして鳥取大学は先日記念式典も開催されましたが、70 周年と、またこれも記念すべき年でございます。この間、鳥取大学の知と実践の融合という基本理念のもとに、地域はもちろん、地球規模での課題解決等に、今、教育、研究を取り組んでこられて、それを支え、実践する有為な人材も多数輩出いただいていること、何より鳥取県に多大な貢献をいただいていることに、改めまして敬意と感謝を申し上げたいと思います。

本日のこの研究会、先ほどからありますとおり、テーマが「地域をえがくー想像力としての地域学」ということでございます。私は、残念ながら学問としての地域学は学んだことはないのでありますけれども、先ほど学長さんからもございました、つながりを取り戻すということでしょうか。あるいは、一人一人がみずからの生活や地域を見詰め直す、そういう内省の営みというものを促して支える、そういう学問、教育であるというふうに向っております。現在、鳥取県もそうですが、地域はさまざまな課題に直面しております。先ほどの医療の問題であったり、あるいは若者を中心とした都会への人口流出、過疎であったり、あるいは地域の中心である市街地にあっても空き店舗等の空洞化、こういったものがさまざまございます。そういう課題に取り組んでいるところでございますけれども、よく言う地方創生や、地域活性化にあたっての成功例では、若者・よそ者・ばか者ということが言われております。共通するのは、恐らく、固定概念とか既成概念、そういったものがないとか、とらわれない、そういう視点を持って、しっかり客観的に見ながら、専門性も持って、がむしゃらにエネルギーを持って取り組んでいく、そういう人材であろうかと思えますし、何よりそれを受け入れる地域の方々がそれを理解しているということがあって成り立っている、成功しているのかなというふうに思います。

今回、こういうテーマでありますけれども、やはり一人一人が身近な自分の生活のちょっとした変

化というものをしっかり見詰めることができる、それに気づくことができる、そういう人々がたくさんいる、そういう地域であるということが何より大切だろうというふうに思います。そういう意味で、今回の柴崎先生の基調講演から4名の方のシンポジウム、総括セッションを通じて、そういう身近な自分の生活の中での変化に気づきながら、想像力を持って自分たちの地域をどうするか描いていく、そういう機会になればというふうに思います。私も大変期待もし、楽しみにしておるところでございます。「マネジメント」で知られております、ピーター・ドラッカーも、イノベーションの成功に当たっては、機会、これは変化と言ってもいいと思います。機会、変化を正しく見つけ出すことが何より大切であるというふうに言っております。これは、やはり共通することだというふうに思います。

本日のこの研究会が、御参加の皆様にとって有意義となることを祈念申し上げ、さらには御参加の皆さん方のますますの御健勝と御活躍、そして鳥取大学地域学部の一層の御発展を祈念申し上げます、私からの御挨拶とさせていただきます。本日は、本当におめでとうでございます。



広瀬龍一氏

趣旨説明

中原 計（地域学研究会副会長）

皆様、おはようございます。地域学部で地域学研究会の副会長を務めさせていただいています、中原と申します。よろしくお願いたします。

本日、地域学研究会の研究大会は、第10回を迎えることができました。今年度のテーマは「地域をえがく—想像力としての地域学」です。これがどういふところを意図して計画されたのかということこれから説明させていただきます。

まず、皆様が今、日常目にされている地域の景色ですけれども、見ている景色の中にはさまざまな時間の異なるものが同時に存在しているということが1つ挙げられるかなというふうに思います。それは、現在までいろんなものが歴史的に積み重なってきて、現代という時間の中で同時に併存しています。鳥取大学もそうですけれども、キャンパス内に大熊段古墳や琵琶隈古墳という古墳時代の前方後円墳が存在している中で、現在の大学の営みが行われています。加えて、それぞれを見つめる我々の意識であるとか、知識、思い入れによって、地域の景色はそれぞれ個人で随分違うのではないかと思います。

具体的な資料として、今回、鳥取砂丘を例にあげて説明をさせていただこうかと思います。鳥取の方だと1回はおそらく行かれたことがあるのではないかと思いますし、鳥取というと鳥取砂丘がかなり初めのほうに思い浮かぶことかなと思われま。ただ、何も知らないで鳥取砂丘に行くと、地形的なものであるとか、広く砂がむき出しの状態というのが目につくだけなのではと思います。けれども、専門に引きつけてお話をすると、例えば地面の上にはさまざまな時代の人が残していった痕跡があります。

縄文時代の人が残していった縄文土器、古墳時代の人が残していった須恵器とよばれる土器、古代の人が残していった土師器とよばれる土器などの破片、また、縄文時代の人が使った石の鎌、近代に明治期に陸軍の演習場になっていたときに残された鉄砲の銃弾、そのようなものが残されています。このように、縄文時代ですと大体3000年とか4000年ぐらい前のものから近代までかけて、現代の鳥取砂丘の表面の上にはこのような時間の異なるものが一緒に存在しているということです。それらを意識的に見てみると、鳥取砂丘というところがもう少し違った姿に見えるのではないかなと思います。

私は、大学の研究室で観光地砂丘のすぐ東側の福部というところにある直浪遺跡という遺跡を調査したことがあります。砂丘というと観光地砂丘は砂むき出しですけれども、それ以外の場所は、砂地なのですけれども、木が生えたり、やぶになったりしています。これが普通の、本当はこのように植物が生える姿というのが本来の姿です。そこを調査するとこのような砂の堆積が観察できます。下のほうに少し黒くなっているところとその上に少し白くなっている部分、そしてまた黒くなってい

る部分があります。この下の黒いところというのは弥生時代の人が生活していた地表面です。弥生時代の終わりぐらいですので、今から 1900 年とか、それぐらい前かなというところの地面がこの部分です。そのあと、人が少しいなくなる期間があり、砂が堆積していった、この上の黒い部分は古墳時代の終わりぐらい、6 世紀ぐらいです。ですので、6 世紀ぐらいになると弥生時代よりも随分高いところの地面、地表のところで生活をしていることとなります。こういうふうに物理的な時間の積み重なりというのが、土の堆積として観察できるというところ。ちょっとスケールがわかりにくいのでスケールバーを出していますけれども、弥生時代のところから古墳時代のところまでいくと、大体 1メートルぐらいは地面が実際に上がっているというところ。

このような積み重なりは、鳥取砂丘だけではなくて、日常我々が生活している街の中にも全てこのような時間の積み重なりというものが物理的に存在しています。その上で我々が生活をしているということです。それぞれの時代にいろいろつくられたものというのが、その時代で消えてなくなってしまいうものもありますけれども、現代まで残ってきているものも多くあって、そういったものが我々の目の前で展開をしています。それを我々がどう見るかによって、地域の姿というのがいろんなふうに見えていると考えているわけです。それをお互いに共有するために、地域の見え方や見つけ方について議論し、それをもとに想像することが大切なのではないかということが、本大会の趣旨です。

本日の大会のプログラムですけれども、午前中は講師として柴崎友香さんをお迎えして、小説で街を描くということで、柴崎さんの作品の中には、時間の過去に行ったり、また現代に戻ったりと、そういうふうな描写で話が展開していくという作品もあって、柴崎さんならではの地域の見え方だとか見つけ方というのをお話しいただけるのではないかなというふうに考えております。午後のシンポジウムとしては、蛇谷さんと福田さん、そして佐藤さんと佐々木さんと 4 人の方にそれぞれ講演とコメントをいただきながら、それぞれ現代を生きる鳥取の人と過去の姿を見ながら現代を見ているという、そういう時間の違うところで鳥取という地域がどういうふうに変ってきているのかというところをお話いただくということになっております。そういった過去から現代へと道のりをずっ

とたどっていくと、その道のりの先には現代から未来へはどう移り変わっていくのかなというのが、おぼろげながらも見えるのではないかなというふうに考えますので、過去から現代に行った先の姿をまた想像していくということも、もう一つ本大会の趣旨として上げられるのではないかなというふうに考えております。

以上が私からの趣旨説明となります。本日は一日、よろしく願いいたします。

Ⅱ. 基調講演：「小説で街をえがく」

柴崎 友香（小説家）

柴崎友香と申します。本日は、このような場所でお話しさせていただけるということで、本当にどうもありがとうございます。よろしく願いします。

私は、なかなか、こういう場所で一人で話をするということにちょっとなれていなくて、今年の夏に東京である文学教室という結構大きなイベントで初めて 1 時間しゃべったら、最後のほうはどこで息継ぎをしいいかわからなくなって苦しかったんですが、今日はそういうところもありますので、ちょっと休み休み話すかもしれないんですが、よろしく願いします。

私は、大阪府立大学で人文地理学を専攻してまして、そのときの先生が藤井正先生ということで、その御縁で今日はこちらでお話しさせていただくことになりました。大学で人文地理学を勉強したんですけれども、大学に入ったときは地理をやろうとは全然思っていなくて、私は大阪府立大学の総合科学部というところだったんですが、そこは入ってから専攻を選べるということでした。私は、ももとは違う勉強をしようと思っていたのですが、人文地理学の藤井先生の授業に出たときに余りにもおもしろくて、これを勉強しよう決めました。でも、そもそも人文地理学という分野があるということそのときまでははっきりと意識していなかったんですが、思えば子供のころからそういうことに興味があったと、今、振り返ってみても思います。例えば、大阪には国立民族学博物館というところが千里の万博公園の中にありますが、その博物館が本当に子供のころから好きでした。そこにある世界中の地域の生活の道具を見ていると、何か人間のおもしろさといいますか、世界中、形は少しずつ違うんですが同じような目的のものをつくっていたり、その多様性と共通点を

見ると、人間の豊かさみたいなものが想像できて、とても楽しかったんです。それから、小学校の4年生のときに、広島郊外のほうのいとこの家にしばらく遊びに行ったことがあるのですが、そのときも大阪と屋根瓦が違うということにばかり興味を持ちました。屋根瓦の端っこに何か飾りのようなものがついているんですけども、それぞれの家でいろんな形をしていて、他に遊ぶことよりもその屋根瓦の種類を分類して数えることばかり一生懸命やっていたので、もともとそういうことに興味があったんだと思います。

それで、大阪府立大学の1年生のときに受けた人文地理学の授業ですけれども、大阪ということもあって、大阪の街の成り立ちを解説するという授業でした。これは大阪の近世の地図だと思うんですけども、天保7年と書いています。これがその当時の大阪の地図で、ここが大坂城です。こちら側に書いてないですが港と海がありまして、こっち側が北、こっち側が南、今だとこの辺に大阪駅があって、ここが中之島、このあたりが難波なんですけれども、このあたりの堀が埋められている以外は、ほぼこの区画のまま、今も大阪の街の区画はあります。



講演の様子

当時の地図ですが、今はここに大阪駅、ここに難波があって、真ん中を道路の御堂筋と地下鉄御堂筋線が通っていて、それが大阪の南北の大動脈になっています。今は主に南北を中心とした構造になっているんですけども、昔はこの大坂城と大阪港をつなぐ東西の線のほうが主軸だった。このあたりの街の構造も、東側から一丁目、二丁目、三丁目、四丁目と大坂城を中心にして街が並んでいると解説を授業で聞きました。今まで生活していた街が歴史的な経緯の上にあることを聞いて実際の今自

分が暮らしている街の構造を見てみると、当時の人々の生活が見えてくるということに気づいて、もっと深く知りたいと思いました。

昨日、鳥取の古地図もちょっと見せていただきました。城下町の似たような碁盤の目の区画になっていて、道の両側を挟んで一つの街が形成されているというところもとても似ていました。それで、私はこういうところから地理学の勉強を始めたのですが、先ほどのお話で、都市の風景には時間的な重層性があらわれているとうかがいました。まさにその通りで、都市の風景の中に、都市の風景や自分が歩いて見ている街に残っている痕跡だったり、あるいは地図を見たりしていても過去の時代の人が暮らしてきた形跡だったり、歴史の積み重ねというものがあらわれているということが興味深く、だんだんと自分の関心が風景のほうに、都市の風景に移り変わっていきました。

これが私の卒論です。25年ぐらい前なので大分古いですが、ここに『都市による風景のイメージ』とタイトルが書いてあります。大阪の風景を写した古い写真だったり、あるいはもっと近い時代の写真で、古いものと新しいものが一緒に写っているような写真から、人が都市に対して持っているイメージだったり大阪で暮らしてきた人たちの生活に対する意識だったり、大阪で暮らしている人たちの何か結節点のようなものになっているということ、何とか書いたと思うんですけども、どうだったでしょうか。こちらが資料で集めた写真で、コピーなので見えにくいですが、上の写真が大阪の空襲の直後の写真です。一面の焼け野原ですが、碁盤の目の区画だったり、わずかに残っている建物から今の場所がわかります。その下が、その後、再建された御堂筋です。その後、高さ60メートルの規制がずっと続いていて長い間ずっと同じ高さのビルがそろっていたんですけども、この20年ぐらいでその規制が緩和されて大分風景が変わりました。

小説やフィクションにおける街の書き方は、幾つかに分類されます。最も抽象度が高いのは、例えば、星新一のようにS市とかN市とか、どこでもないけれどもどこでもあるような場所を設定する書き方です。その場合は、場所の具体性だったり具体的な歴史といったものよりも、都市であるとか地方であるといった場所の要素を取り出して書くということが重要になる作品だったり、あるいはその具体性や歴史性がかえってその作品の邪魔になるような、もっとシンプルな形で書きたい場合は、抽

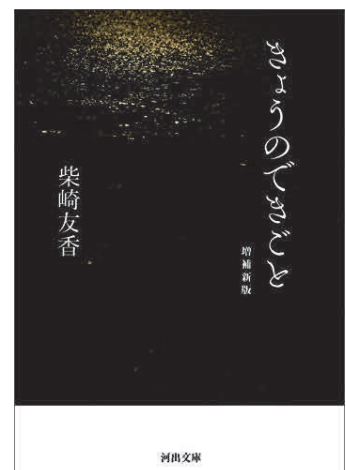
象的な書き方を採用します。いちばん多いのは、適度に抽象的で適度に具体的な書き方です。特に、エンターテインメント作品とかテレビドラマなんかはそうですね。「郊外の住宅地」というような形で、マイホームが並ぶニュータウン、かといって具体的な駅名なんかは出てこない。モデルとしている場所はありつつも、地名は出さないという描き方が一番多いというか、それが万人に受け入れられやすい描き方です。駅だったり学校だったり商店街とか、あるいは東京の郊外とか地方都市だとか電車などの移動距離で示したり、国道沿いの風景を描いたり、ある程度具体的に要素を示しながら街の雰囲気や生活の息づかいを伝えつつ、そこで生活している人々の暮らしを描くというのが最もポピュラーな描き方で、特に近年はそうだと思います。

私の小説は、その中でも最も具体度が高い書き方です。具体的な地名を書き込んだり、現実の地形や地図に沿った場所を書いています。さらに、街そのものであったり、具体的な場所を示す要素自体が小説の主役であったり、欠かせない要素、その小説の全体を決めるような要素になっている作家を、私は読者としてもそういう小説が好きで読んできました。例えば、東京だったら夏目漱石、大阪だったら織田作之助というような作家が、その場所の雰囲気だったり、そこに暮らす人々の表情の違いなどを細かく書き込んで、その街で生きる人々だったりつながりなどを、その場所を知らない人が読んでも想像ができるように書いています。

外国の小説でもそういう具体的な場所を書き込んだ小説が好きです。この5月にアイルランドのダブリンを訪れました。ダブリンといえばジェームズ・ジョイスですが、『ダブリナーズ』や『ユリシーズ』など、ダブリンを舞台にした小説を書いています。今でもダブリンの街路というのは、100年前のほぼそのままです。出てくるお店や建物もかなり残っています。だから、ジョイスの本を片手にダブリンの街を歩くという楽しみがあります。そうして歩いていると、行ったときに『ユリシーズ』の中に出てくる登場人物が石けんを買った店というのが今でも残ってしまっていて、でもそこはもう石けん屋さんとしては営業してなくてジョイスファンの集まる店になっています。私が行ったときにはたまたまそのファンの人たちの朗読会をやっていて、『ユリシーズ』について話し合っていました。もう100年前の小説なんですけれども、まだこんなに話すことがあるというのはすばらしいというか、しかもそれが街の人にこんなに愛されてい

て根づいているということをやまやましいなと感じました。日本の街ですと、出てきた場所が大体もうほとんど残っていません。そういうふうには街を書いていくことの独特の難しさがあると思います。ジョイス自身は、若いときにアイルランドを離れてスイスやフランスに住んでいてほとんどダブリンへは戻らなかったそうですが、離れていてもずっとダブリンのことを書き続けました。ほかの場所を舞台にした小説というのは、余り書いていないと思います。離れていても自分がその街に戻らないと思っても、その街を書き続けるという吸引力と言いますか、何にそこまでジョイスがこだわって書いていたのかというのは、もう少し作品を読み込んで考えたいところです。

この画面に出ているのが『きょうのできごと』、私のデビュー作です。京都や大阪の学生たちが一人の友人の引っ越し祝いに集まった一日の話です。その一日の話を、5人の違う視点の人物から短編の形で書いている、5本の短編で一日の出来事を描いているという小説です。最初に入っているとても短い話だけがまず雑誌に載り、その後でほかの4つの話を考えて書くという形ででき上がったもので、最初から5つの視点という構成を考えたものではなくて、偶発的に生まれた小説です。場所の書き方だったり視点の書き方というのが、よくデビュー作にはその作家の要素が詰まっているというようなことを言われたりしますが、今読みかえしてみると、確かに、複数の視点であったり移動の場面に注目して書かれたり、自分の気になるものが詰まった作品になっています。最初に雑誌に載ったときに、冒頭が京都から車に乗って大阪に帰る幼なじみの2人がいて、その1人が目を覚ます、そうすると車が京都南インターの高速道路のちょうど料金所を通るところという場面から小説が始まります。雑誌に掲載されたときは、運転している友達がお金を払っていたと書いたんですが、それを読んでくださった藤井先生から、いや、京都南インターは自動ですと、お金は払いませんというメールをいただきました。単行本



にするときはちゃんと直しました。最近何度か話題になっていますけれども、出版社の校閲部というのはとても優秀で細かくチェックしてくれるんですが、これはそのとき校閲部から何も言われなくて、藤井先生のほうがやはりそこは詳しかったということです。

その後書いた小説も、場所と移動が自分の中でずっとテーマになっています。この『青空感傷ツアー』という小説は、女友達2人が行き当たりばったりで遠くに旅行するという話で、まず東京で久々に再会するという場面から始まり、大阪に戻り、それから突然トルコに旅行に行き、その後戻ってきてたまたま呼び出した友達の実家がある徳島に行き、最後は石垣島に行くという小説です。観光地の観光地らしさと本物らしさというのはどういう関係があるのかみたいなことを念頭に置きつつ書いたのですが、余りそういうところを読み取ってくださった方は少なかったです。

4冊目に出した『ショートカット』という小説は、一応帯のコピーが「遠距離恋愛」とか「奇跡は距離を超える」とか書いてあるんですがそうしないと売れないというか、余り読者の方の目にとまらないというのでそういうコピーになっています。私としては、これは新幹線は短時間で移動ができてすごいということを書きたかった小説です。切符を買って、新幹線って突然乗れますよね。飛行機は予約したり、かなり前に飛行場に行かないといけないんですが、新幹線って思い立ったら、切符を買ったら乗って、2時間半後には東京から大阪、大阪から東京に着いている。例えば江戸時代の人から考えてみれば、SFのような、信じられないような話なのではないかと思って、その移動の感覚というのは100年ちょっとの間にそれだけ移動する感覚が変わって、それは人間の意識にどういうふうな影響を与えているのかなということを思いながら書いた小説です。NHK番組のような作った人の苦労話ではなくて、移動の感覚そのものを書きたかったんです。今、飛行機はかなり前に空港に行かないと乗れなくてと言いましたが、ここからは鳥取空港にはすぐ行ったらすぐ乗れるときのう伺ったので、そういう距離感のものも書いてみたいなどと、話しながらふと思いました。

場所だったり、地域、土地、街を前面にテーマにしたのは『その街の今は』という小説です。これは、大阪の古い写真を集めている失業中の20代の女性が、その写真を探しながら、自分が暮らしている街の中で、昔の痕跡だったり、誰かの、アルバイト先の喫

茶店に来たお客さんの記憶の中の風景を何とかして自分も見たいと思うような話です。これは、まさに卒論の小説バージョンと私は思っています。卒論を書いているときに、この昔の写真を見たときに自分の中に沸き上がってくる感情は

一体何なんだろうということを書いた小説の形で書いてみたいと思ったのでした。どうしても過去を書くとか、自分が住んでいる街の歴史というつながりに思いをはせるというようなストーリーだと、小説だったりドラマだったりだと、どうしても血縁、自分のルーツを探っていくという形になりがちなんです。私はそうではない形を模索したい。たまたま街である場所、ある街で、たまたま同じところに生きていた人たちのつながりだったり、記憶の蓄積みたいなものにつなげていけないかと、今に至るまでずっと考えています。ルーツをたどるだとか、あるいは家族の中だと限界があるからです。もちろん、家族関係も重要ですが、その中にとどまるのではなくて、もっと関係性を広げていきたい、小説の中でその可能性を探りたいというのが自分の中で大きなテーマとしてあります。この小説は、大阪の関西テレビで90分のドラマになりました。その年の賞もいただきました。書く前にたまたま関西のローカルニュースで大阪の街を撮った8ミリ上映会を見たのですが、その場面を小説の中に書きました。ドラマ化されたときには実際にその8ミリフィルムを収集して、上映会をされている方たちに出演していただいて、上映会の様子がドラマの中に取り入れられました。小説を書くということは、ただ物語にして完結するというのではなくて、現実の暮らしだったり現実の出来事に影響していくことなんだなというのも、この小説で体験しました。

この小説が出版されてしばらくの間に感じたことは、日本の大都市で街を書くとき、書いたものが片端から失われていくということです。余りにも変化が早いので、書いたものがもうどんどんなくなっていく。これは、船場にあった古い建物を改装したギャラリーカフェが出てくるんですが、そのモ



デルになった店は、私がこの小説を書いて雑誌に掲載された後、友人から、「あのカフェ、火事でなくなっただけで隣のマージャン屋からのもらい火事で建物がもうない」と言われて、とても驚いたのを覚えています。その後、オーナーの方は別の場所でバーとカフェを再開されたんですが、その店も去年閉店しました。この小説の中には、大阪の心齋橋の風景をたくさん書いたんですが、たソニータワーもなくなりました。戦前からあったそごうの建物は既に新しい建物に建てかわっていたのですが、そのそごう自体が閉店してしまって、大丸北館になり、その大丸の本体は4年前に建てかえが始まって、2カ月前に新しい建物になってオープンしました。どんどんどんどん書いた場所がなくなっていってしまうという、これはさっき少しお話ししましたジョイスが書いたダブリンとか、ヨーロッパの街とは全然違うところです。失われていくから書くというわけではないのですが、自分が書いた場所、実際に自分が愛着を持って過ごしていた場所だったり、とても好きな風景だったんですが、それを書くということによって、その場所自体、風景自体は失われてしまっても、小説の中に残る、またそれを読んだ人がその風景を思い出してくれるということがあればいいのではないかと。本当は建物が残ってほしいんですけども、それでも何かしらの役割が小説にあるのかもしれないと考えるようになりました。文庫版の表紙のこの建物はまだあります。黄色いほうは喫茶店だったんですけども、喫茶店は閉店して建物はまだ残っています。黄色ではなくて紺色になっていました。

その後、私は2005年にこの小説を、その直前でですね、これは東京に移ってから書いた最初の小説になります。東京にいて大阪を書くということに私は意味があったと思っています。私は30歳までずっと大阪で生まれ育ったんですが、一度ずっと自分がその中にいた街から離れて、東京にいて大阪を思い出しながら書くということ自体に、それは意図したわけではなくて偶然そうなったわけなんですけど、そこに意味があったと思うようになりました。1つは、距離を置いて大阪を外側から見る、ある程度ちょっと客観的に見る、あるいは他の街との違いというのを意識しながら見るができるようになったことでもありましたし、記憶の中の風景を書く、実際、目の前にあると見えないことが、思い出していると見えてくるのではないかと、この小説を書いた経験から感じるようになりました。

その後、2012年に書いた『わたしがいなかった街

で』という小説が、本格的に東京を書いた小説になります。なぜ東京に引っ越したかというのを少しだけお話ししますと、先ほども言いましたように30歳までずっと同じ、生まれた街にずっと住んでいたの、ちょっとそのころに家族の関係でもいろいろあって、このままだと私は一生この街から出ないのではないかと思います。私は本当に大阪が好きで楽しくて、遊びに行くところもたくさんあって、友達もいて、全然その街を離れるということ考えたこともなかったんですが、もしかしたら別のところに行って、そこで一度違う視点で生活をしてみたほうがいいのかも思っていて、東京に引っ越しました。

東京に引っ越した先は、世田谷区で、東急世田谷線という小さい2両編成の電車があるんですが、その沿線に引っ越しました。友達がそのあたりに住んでいてよく泊めてもらっていたんですが、このあたりだと仕事先に行くのも便利だし、友達も住んでいるので何かあったら助けてもらえるだろうし、何より世田谷線の雰囲気がとても好きで、このあたりに住んだら楽しそうと思ったんです。私が引っ越す直前まで東急世田谷線は、最後の木造の電車が走っていました。2004年に乗りに行ったんですが、もうその木造電車があと1カ月だったので、カメラを下げた人しか乗ってなくて、みんなが写真を撮っている状態でした。東急世田谷線は、路面電車ではなくて、専用軌道なので自動車と一緒に走る道は走りません。東京放射状に電車の各線が走っている中で、その中でも貴重な縦の線です。短いんですが3つの私鉄をつないでいて、意外に便利なんです。東京の人にも意外に存在を知られてなくて、改札がなくて乗るときにお金を払うのですが、乗ってどこでお金を払うのかわからずただ乗りしてしまったという人が身近にも何人かいます。

そこから、渋谷行きのバスに乗ってよく渋谷に行っていたのですが、玉川通り、国道246号線沿いの目黒区と渋谷区の境目あたりにちょうど日本地図センターという建物が見えていました。多分地図がいっぱいあるんだろうなと思って、あるとき



バスをおりてその日本地図センターというところに行ってみました。日本地図センターが発行している『地図中心』という薄い冊子がありまして、たまたまそれを手に取りました。資料として配った、「世田谷・多摩地区の空襲」と書いてあるのが、そのときに買った『地図中心』です。日付を見ていただくと2005年ディッセンバーになっていて、私は2005年の10月に東京に引っ越しましたので、ちょうどその直後に発行された号ということになります。

私はそれ以前から戦争中の出来事や空襲に興味を持っていました。『その街の今は』にもちらっと書いたのですが、大学の地理の授業のときに、航空写真、空中写真を見た。私はよく、自分の家の近くだったり、大阪の写真を見ていました。昭和22、23年は、アメリカ軍の飛行機から撮られています。自分が知っている心齋橋の、今は本当ににぎやかな、人がいっぱい建物もぎっしり詰まっている心齋橋のあたりが、もう一面焼け野原で、爆弾が落ちた跡もあちこちにまだ残っていたり、そこを畑にして何か大根みたいなものが植わっているのが、その写真を見てもよくわかりました。そのことにまずすごく衝撃を受けて、やっぱりどうしても自分の中では戦時中の映像や写真を見ても、自分とは別の世界のような、どこか遠い過去のような感覚があったんですが、その写真を見たときに、戦争があった場所と自分が生活している場所はつながっていたんだという感覚を強く持ちました。私は大阪の大正区というところで生まれ育ったんですが、その同じ時期に撮られた地元の写真を見たら、私は碁盤の目で道路幅も広い市営住宅が建ち並ぶ区画に住んでいたんですが、その区画はもう見事に空襲によって焼けた地域でした。隣の小学校の校区に入ると、古い長屋が残っていて道もすごくごちゃごちゃしていたんですが、その隣の校区の道がごちゃごちゃしていて長屋がたくさんある地域は空襲で焼け残った地域、区画が整理されて道路幅も広い地域は空襲で焼けた地域だったということがすごく如実にわかって、その感覚を何かの形であらわしたいという思いをずっと持ち続けていました。

その経験もあって、たまたま『地図中心』のこの記事を読む前までは、私はてっきり世田谷というのは道がごちゃごちゃしているというので有名なところだから、空襲がなかった地域だと思い込んでいました。東京に遊びに行くようになる前に、テレビで『上品ドライバー』というタクシーの運転手のパロディードラマのシリーズをみました。世

田谷区の経堂というところに迷い込んだタクシー運転手が病気で途中で倒れてしまって、ペーパードライバーのお客さんがそこからどうやって抜け出すかというコメディのドラマなんですけれども、水道道路という唯一真っすぐな道路があって、そこにたどり着けば出られるとか言いながら無線で誘導する話でした。偶然、友達が引っ越した先がそこで、カーナビを開発するときにそこで試験をしたと言われているぐらい道がごちゃごちゃしたところなんです。

世田谷区は、私が引っ越したときでもまだ結構、畑なんかもありましたし、戦時中だと東京の郊外のほうに当たるので、戦後に東京の中心の東側の空襲にあった地域からたくさん人が引っ越してきた地域でもあるので、空襲はなかったと思い込んでいました。それが『地図中心』の記事を読んだときに、まさに自分が引っ越したそこに空襲があったということを知りました。地図の中の真ん中に走っているのが世田谷線なんですけど、引っ越して最初に住んだのがこの「しょういんじんしやまへ」という、左のほうに平仮名で書いてありますが、そのあたりです。焼け野原になるようなことはなかったんですが、単発的な空襲があったようです。

この記事に出てくる、戦前に活躍されていた海野十三というSFや探偵小説を書いた作家が、若林というところに住んでいて、詳細な日記を残していることを知りました。この日記を探して読んでみると、確かに自分が引っ越した先の周りのことが詳細に書いてある。どのあたりに被害があったのかかなり詳しくわかりました。それが、この記事の後ろについている海野十三の『降伏日記』の一部です。最初は『空襲日記』という名前で書き始められるんですが、海野十三はもともと工学系の人だったので、最初の空襲がある以前からきつこういう攻撃がされるのではないかと、客観的で科学的な予想をしていて、早い時期から日記そのことを詳細に書いています。実際に日本が敗戦する前のドイツが降伏した時点から日記の名前が『降伏日記』に変わります。昭和20年の5月26日と日付がありますが、25日の深夜、東京の西側、四谷あたりから西のほうにかけてかなり大きな被害があった空襲の日です。

このあたりに書いてあることもかなり実際の道をたどることができました。爆弾がああそこ落ちてたらしいと書いてあるんですが、そこで「萩原さんのところだ!」「奥山さんだ!」「松原さんだ!」と書いてあります。それが先ほどの世田谷線が走

っている地図の「5」の数字があるあたり、そこが萩原さんだと思うんです。歩いていると、ここに萩原さんという大邸宅がありまして、ちょっとした小山があって、そこに「萩原園」という謎の建物があつたのが世田谷線からよく見えました。この部分を読んだときに、萩原さんってあの萩原さんかと思ったんですが、多分大地主さんで武蔵野らしいケヤキの大きな屋敷林が遠くからでも見えるような大きな敷地のお宅です。私があるときに住んでいたアパートの2階のベランダからもそのケヤキの木は見えていました。だから、ベランダから外を見ると、ああ、あのあたりに爆弾が落ちたというのが、こういう角度で見えたのかなと想像したりもしました。海野十三の家がどこにあつたのかは特定できなかったのですが、かなり近いところにあつたはず。萩原さん、奥山さんの次に松原さんだと書いてありますが、この松原さんは、世田谷線の松陰神社の次の3つ先の駅が松原という駅で、地図には松原町という地名も見えます。その名前のおりこのあたりにたくさん土地を持っている松原一族の松原さんです。でもその中のどの松原さんの家かはちょっとわかりませんでした。私が東京に引っ越して、2軒目に住んだ家の大家さんも松原さんでした。

たまたま地図センターに行ってみて、たまたま開いた冊子でたまたま知った海野十三という作家が自分の近いところに住んでいて、その中に書かれている事実が今の自分の生活と本当に結びついているということに愕然として、さらにまたこんなところまで空襲があつたって、それを自分が全然知らなかったということにも強い衝撃を受けました。何かしらこの空襲に対する、今東京で生きている人と過去にあつた空襲とのかかわりを書きたいと考えるようになりました。そのときに、一つの書き方としては、実際に戦時中のことを取材したり資料を集めたりして、当時の出来事を書くのが一つの方法です。その書き方での小説も幾つか考えたのですか、やっぱりそれはどうしても自分が書きあわしたい感じではないという結論になりました。

今までもいろんな小説だったり映画だったり描いてきたことなんです。過去にこういうことがあつたという物語にしてしまうと、もちろんそこからでもたくさん想像されて今とつながっていると感覚を得られる方もたくさんいらっしゃるんですが、どうしても物語という中にその体験だったり感覚が閉じてしまう。ああ、昔はそういう

ことがあつたんだね、大変だつたんだね、今は平和でよかつたねと、何かそこで体験が切り離されてしまうということに疑問を感じて、戦争の間の出来事を描いた小説だったり物語に触れながら、それを何か乗り越える方法はないのだろうかと考えてきました。

『わたしがいなかった街で』は、現在世田谷区に住んでいる、今を生きている人が過去に書かれた日記と場所を通じて、街を通じて、その体験を重ね合わせることから想像するという形式になりました。

もう一つこの小説で重要なモチーフになっているのが、大阪の、現在はJRの京橋駅であつた大きな空襲、爆撃です。8月14日、終戦の前日のお昼に京橋駅にかなり大きな爆弾が落とされました。お昼で当時は電車の本数も少なかったもので、満員状態で乗っていた車両を爆弾が貫通しました。片町線と、今は環状線になっている線路が2つ交差しているところなんです。その両方のホームにいた人たちに大きな被害が出て、多分何百人も亡くなれていると思うんですが、その翌日が終戦の混乱もあつて正確な数もわからないですし、行方不明のままの方がかなりいらっしゃるということです。京橋駅のすぐ近く、さっき地図に出しました大阪城がすぐ南側にあります。戦時中は陸軍の施設や砲兵工廠があり、そのあたりを中心に、激しい空襲が何度もありました。京橋駅に8月14日に空襲があつたと知つたのは、20代の半ばごろ。多分夕方のローカルのニュースか何かを見ていてそのことを知りました。京橋駅は、高校時代に友人がその近所にたくさん住んでいて、しょっちゅう使っていたとてもなじみのある駅で、大きい駅で乗りかえの駅でもありますし、大阪の人にとってはとてもなじみのある駅です。駅の中にもそのことがわかるようなものは何もありませんし、知っている人もそんなにいません。大阪大空襲に比べると、8月14日にある慰霊祭の様子がちょっと夕方のニュースで放送されるぐらいです。自分が普通に使っていた駅で、しかも終戦の前日、あと1日違っていればということはどうしても考えずにはいられませんでした。

その空襲のことと、自分が引っ越した先の世田ヶ谷であつた空襲が結びついて、自分が今、生きている時代と、時間は隔たっているけれども、同じ場所ということをつなげることはできないかと思って『わたしがいなかった街で』を書きました。どうしてもその過去の、しかも何十年も前の体験とい

うのは遠いものに感じられるし、その時代に生きていた人たちと私は直接話すこともできませんが、日記を丹念に読んだり、書かれた場所を実際に自分が歩いてみることによって想像したり、そのときの風景を想像の中で見ることができるのではないかとひたすら考えている小説になりました。

この小説の直前に「ハルツームにわたしはいない」という短編を書き、三度目の芥川賞候補になりました。文芸誌に載った小説の中で、初めてスマートフォンを書いた小説だと思っているんですが、「ハルツームにわたしがいない」は、iphoneを持ち歩いて、現在地や世界の天気を確認しているのが重要な要素になっています。ハルツームは、スーダンの世界で一番暑いところの近くなんですが、iphoneは世界中の天気を確認できるというアプリがついていて、自分が行ったことのない遠い場所の気温や天気をいつも確認しているというモチーフが出てきます。なぜそれを書いたかといいますと、昔なら、ハルツームの気温をリアルタイムで確認することもできなかったし、そういう場所があることさえ知らなかったかもしれないし、その場所を想像するということはなかったと思います。でも、今を生きている私たちは、その場所のことも知っているし、想像することもできるし、あるいはニュースで地球の裏側で起こっている、一見、自分とは関係ないような戦争や事件をニュースで知ることがあるかもしれない。ただ、そうやって一方的に知るだけではなく、実は全然自分は気がついていないけれども、その国から来た農産物やつくられたものを使っているかもしれない。だんだんたどっていくと、そこに自分の生活もつながっているかもしれない。それが、一見、見えないけれどもつながっている、あるいは想像しなくてもいいかもしれないけれども、想像することができる。それが今を生きている人間のかかわり方、遠い場所とのかかわり方なのではないか、無関係ではいられないのではないかということ、その天気予報を見ながら考えました。だから『わたしがいなかった街で』も、タイトルが『わたしがいなかった街で』とあるように、自分がいなかった時間、いなかった場所で起きた出来事と自分がどうかかわるのかということ、過去の日記や地図を重ねることによってあらわしたくて書いた小説です。

この『わたしがいなかった街で』は、それまでの私の読者とはまた違った人にたくさん読んでいただいて、とても読者が広がった小説でもありました。でも一方で、どうしても街を詳細に、街や場所や

風景を詳細に書くと、話に関係のないことが多過ぎるとか、どうでもいいことが書いてあるとか言われがちです。それは、小説ってどうしても登場人物がどうしたとか感情的な部分を書くものという、先入観といいますか、そこばかりが注目されがちで、街の部分だったり風景だとかは、背景とか舞台と呼ばれます。私はそうではなくて、街自体を書きたい、街を詳細に見ること、風景を詳細に見ること、それと人のつながりを書くことによって、街というのは何も建物や道路が街なのではなくて、そこで生きている人も含めて街だと、そのこと自体を書きたい。だから、背景でもないし舞台でもないので、『その街の今は』、『わたしがいなかった街で』というタイトルにちゃんと街を入れたのに、『その街の今は』でも、合コンに行く場面で始まるんですが、合コンの小説といわれたりします。街にはいろんな行動をしている人がいるというだけで、そんなにそこをクローズアップされてもなと思ったりするんですが、人間は人間のことばかりを考えがちで、なかなか難しいところです。もちろん、その街や風景の描写が、読む人に想像しやすいように、わかりやすいようにと工夫して書いているのですが、どうしても風景や家のことが書いてあるというだけで読み飛ばされてしまうというところがあり、それをどうやって関心を持って読んでもらうかというのは、一つの課題です。

街をテーマにした小説を書いていく中で、街で生きてきた人のことを実感したい、たとえそれが自分と何の縁もゆかりもない人でも、あるいは会ったこともない、話すこともできない過去の人であっても、自分の今の生活とかかかわっている、あるいはその人の存在を感じることに、想像することによって何か今の生活が、自分自身の人生や生活が支えられているという感覚を小説で書きたい、その思いがとても強くなりました。

『春の庭』が芥川賞をいただいたので『春の庭』で紹介されることが多いのですが、『春の庭』は、わかってくれる人はとてもわかってくれるのですが、一般的にはわかりにくい話だと思います。私としては



『わたしがいなかった街で』に賞をくれたらよかったのになと思っっているんですが、芥川賞は新人の短編に与えられる賞で、『わたしがいなかった街で』は長編です。それで、もうちょっと削れないかと編集者には言われたんですが、どうしても書きたいことを書いたので削れませんでした。だからといって『春の庭』が自分で好きではない作品というわけではありません。

『春の庭』は、世田谷区に古い家があって、その隣のアパートに住んでいる人たちの交流を書いた小説です。最初にアパートの形を、ちょっと出っ張りがある形をしているというのをあらわすのに、かぎ括弧“[”の形をしていると書きました。それは意味がないわけではなくて、『春の庭』は俯瞰の視点を取り入れた小説です。「ハルツームにわたしはいない」で、iphoneの機能を書いたと言いましたが、『春の庭』ではグーグルマップや、スマートフォンで地図を見ることが日常化している中で、俯瞰の視点というものを人が持って街を捉えるようになってきた感覚も書きたいことのひとつだったので、上から見ると図式的だとも書きたかったんです。しかし、芥川賞の選評で村上龍さんに、そんな記号なんかを使うのは小説ではないと書かれまして、そこにこだわられるとは思わなかったのでもっと驚いたんですが、T字路とかコの字型の建物とかというのは、普通に日常の言葉として使いますよ。それがなぜかぎ括弧になったら形容ではないのか、今でも納得していません。むしろ私は記号化して、図的な認識をあらわした結果です。

東京での暮らしの実感から生まれてきた小説でもあります。東京は、ほかの場所から来た人たちが、やってきて住んで、一定期間住んで、また出ていったり、出入りがすごく激しい街です。その中で、もともと地元に住んでいる人もいますし、子供がいたりすると地域社会とのつながりというのはできてきますが、特に若い人で会社の転勤だったり、東京の会社に就職して住むことになって生活している人の大半は、東京に住んでいるけれども東京の地域とはつながっていないのではないかと。東京とひとくくりにはされるけれども、それぞれが別の場所に住んでいて、例えば会社と家の往復しかしないという人も、その周りのことは全然知らないという人もたくさんいます。外からのイメージだと、東京というと新宿とか六本木とかなんですけど、六本木はよっぽど用事がない限りほとんどの人は行かないですし、そのギャップも東京に住んでいておもしろいと感じました。

また、東京に引っ越して最初に驚いたのは、ローカルのニュースがないことでした。大体、どこの地方でも夕方のニュースは、全国ニュースを15分ぐらいやったら、その後はその地域のニュース番組とか情報番組とか、ニュースがあります。地元の問題、例えばその地域の医療が今こういうことで困っているとか、こんな問題が学校で持ち上がっているとか、ローカルなニュースの時間が必ずあるんですが、東京はそれがない。その時間になると500円グルメや、当時よくやっていたのはスズメバチの巣の駆除など、バラエティ番組みたいなことをやっていました。全国ニュースと東京、あるいは関東が、混同されてしまっていて、地域としてのローカルな東京がごっそり抜けている感覚を覚えました。東京にいて、隣の部屋の人の顔も見ることがない暮らしをしています。どんどん住んでいる人が入れかわって行って、すぐ離れていく。その中でも隣り合わせた人たちが一瞬のつながりを持つようなことがあってもいいのではないかという気持ちで、この小説を書きました。

この小説は芥川賞をとったということもありまして、今までで8カ国語に翻訳されて出版されています。その出版された国に行ってイベントをしました。日本語で読んだり、通訳してもらったり、ヨーロッパだと朗読の伝統があるので、俳優さんが来て朗読をしてくださったりするんですが、イベントで読者の方と話をすると、日本の読者と同じように読み取ってもらっているところ、国が違ってもかわらない部分もあれば、文化の違いで、ああ、そういう見方があるのかと気づかされることもたくさんあります。

ドイツ語版が出て、今年の初めにチューリヒとドイツで朗読会をしました。冒頭で、裏の家が築70年ぐらいの相当に古い木造家屋であるという部分があるんですが、毎回そこを朗読するたびに、築70年の古い家は変だと感じました。チューリヒは、建物が築300年400年で、その中で相当に古い家であると読むと、すみません、全然古くなかったですと訂正を入れたくなりました。そういう時間の感じ方も、どの街に暮らしているかによって、どういう風景を見ているかによって、変わってくる。それが時間の重層性とか風景に含まれているということなんだと改めて実感しました。

その少し後に書いたのが、『千の扉』という小説です。これは、東京の新宿区にある戸山ハイツという、巨大な都営アパートの団地の物語です。1970年前後につくられたんですが、全部で33棟あります。

これが建設前の模型で、かなりすっきりして見えますが、今は木がかなり伸びて新宿区の東京の真ん中なんです、森みたいになっています。この団地を書きたいと思ったのは、あの建物の中にたくさんの人の生活、人生が詰まっている、一見、外からはただの箱にしか見えないんですが、その中に人の人生も記憶も思い出も全部詰まっている。もう一つは、私自身が大阪の市営住宅で生まれ育ったので、その場所のおもしろさ、おもしろさを書いてみたいと思っていました。団地って、映画や小説でモチーフになってきましたが、そこで書かれるイメージが画一的でもあります。ほとんどがまず公営住宅ではなくて、公団団地です。70年代は、夢を持った若いファミリーたちが入り、今はもう寂れて高齢化しているみたいなイメージです。その団地ができたころのイメージだと、安部公房の『燃えつきた地図』があります。映画化されていて、勝新太郎と渥美清と市原悦子が出ている不条理なミステリーです。団地に住んでいる怪しい人妻が『家政婦は見た!』の市原悦子なんですが、ここでも団地というのは、一見、外からは幸せに見えるけれども人間性が少なく、怪しいイメージで捉えられています。

これは建設された当時の、手前は木造家屋で、奥にあるのが戸山ハイツの写真です。外観は立派だが、と流行のアパートに住む人はちょっと人間性がない、中にはどういう人がいるかわからないと、怪しげな感じで捉えられているというのがよくわかります。現代の戸山ハイツも、私が知ったのは、多分東京で見ていたテレビ番組で、都心の限界集落であり、高齢化が進んでると取り上げられていました。実際4割以上が65歳以上という、かなり高齢化が進んでいて孤独死が多い。あるいはここは昔、日本軍の施設があったので、おどろおどろしいイメージで怪談話もあちこちで紹介されていました。

公営住宅という存在が知られていないことにも、驚きました。書く前から余り知られてないなと思ってはいたんですが、実際に出版してみると、インタビューに来られる方も、公団と公営の区別がついていらない方も多くいました。先日、とある勉強会に出て、感想を聞く機会があったんです。そこは企業で重要な仕事をしている人たちの集まりでしたが、公営住宅のことを、私はこの小説の中でそんな感じでは書いていないんですが、「向上心のない人たちが抜け出せない場所」、「非効率で再開発したほうが良いところ」と悪意ではなく

書かれていて、偏った見方に驚きました。公営住宅は、社会的なインフラやセーフティーネットとして重要なはずなのに、存在や意義があまりにも知られていないのは、日本の住宅政策、社会福祉の問題だと思います。そういう理由もあって、ステレオタイプな郊外の若い夫婦が高度成長期に住んだ場所ではなく、都心で忘れられたような場所にある公営住宅を書きたいと思いました。

戸山ハイツは歴史的にも興味深い場所です。江戸時代は徳川藩の庭園があり、明治以降は射撃や羽馬の訓練をする場所がありました。こちらは戦後の地図にちょっと注釈を入れているものなんですが、団地の真ん中に箱根山という盛り土をした小さい山があります。20メートルぐらいですが、登ると登山証明書ももらえます。戦時中は、陸軍東京第1病院とか、陸軍の戸山学校があり、かつ関東軍防疫給水拠点と病院がありました。当然、かなりの空襲を受けて、その頃のものはほとんど残っていませんが、少しだけ面影があります。陸軍の建物の一部は今、教会になっています。当時を想像させるようなものはそれぐらいです。道路の石垣に、20年ぐらいまでトンネルの入り口だけがずっと残っていて、そこは軍が逃げるための隠しトンネルではないかと言われていました。東京は、何かあったときに天皇が逃げるための地下通路が張りめぐらされているという都市伝説が根強くあるんですが、それにもつながっているという話があったり、いろんな歴史的な経緯と結びついている場所です。日本の歴史の変化をあらわしている場所だと思って、より一層興味を持ちました。731部隊の関連する施設もあったらしくて、91年に人骨が200体分ぐらい出てきました。戦後は、焼け跡になっていたところにアメリカ軍のかまぼこ兵舎と呼ばれる宿舎ができました。その後、東京都はここを公園にしようという計画を出してはいたんですが、進駐軍から、住宅が足りないのに公園をつくっている場合ではないと言われてできたのが戸山ハイツです。

1951年にできたのは木造の公営住宅です。木造ですが、水洗トイレもあって、当時にしてはすごく



文化的な住宅でした。小説の冒頭にも書きましたが、実際この近くに住んでいた方に取材をして、レコードとかバイオリンの音がよく聞こえてきたとのことでした。文化的な生活をしているイメージだったそうです。コンクリートの高層に建てかえたのが60年代の終わりから70年代の始めです。この写真は、戸山ハイツの西側にある西戸山住宅というところなんです。同じような時期に同じような建物ができています。この場所に住んでいる人や関係ある人のエピソードを、ランダムに、一つの線になるようにではなくて、その団地の別の扉をあけたら違う人生があるという書き方でこの「千の扉」は書きました。

これがかまぼこ兵舎ができたときの写真です。資料を集めたり、そこに住んでいた人の書いたものを集めたりしたんですが、ある場所を調べていくと、そこで暮らしていた人たちのその当時の実感だったり、どういう人生だったか、どういう場所だったかというのが、いろいろ複層的に感じられる。全然知らない人の人生、そこで生活してきた人たちの人生の積み重ねみたいなものを、小説という手段によって、身近に感じてもらえないかと思っています。

これは『春の庭』のカタロニア語版です。スペイン語系の中での一つの言語なんですけれども、私はこの翻訳された小説を確かめることができません。ぎりぎり英語だと何となくわかりますが、中国語だと漢字で推測する程度です。ロシア語は、中を開いてみて、登場人物ぐらいわかるだろうと思ったんですが、タロウしかわからなくて、ほかの登場人物さえどれかもわからず、唯一わかったのは「豆腐」でした。翻訳されて意味が通じると思うかと、よく質問されたりするんですが、イベントをしたときに会場に来られた方の質問から感じるしかあ

りません。これまでの経験では、むしろ日本より通じていると思うことがあります。表紙はそれぞれその国の方がデザインされるんですが、日本以上に小説の内容を理解してくれていると思ったのがこのカタロニア語版です。水色の家の窓枠にトンボがとまって

いて、トンボは小説に出てこないのですが、東京の風景があって、富士山が見えているというのが外国の人だとは思いますが、その風景が映っている窓にとまっているトンボが、半分は実体で、半分は窓と一体化しています。だまし絵っぽくなっていて、「春の庭」はメージの中の東京や、願望としての家と、周りで暮らす人たちというテーマの小説なので、とても内容を酌み取ってもらえていると感じました。

去年、大阪の心齋橋にあったスタンダードブックストアで、私の本のフェアをしていただきました。とてもおもしろい本屋さんだったんですが、今年の4月にビルを建てかえるということで、閉店を余儀なくされました。このビルは実は私が大阪で大学を出た後に4年間働いていた会社の真裏にあって、私が勤めているときに建ったビルなんです。私はこのビルの建設過程を10階にあった更衣室の窓から、写真に撮っていたんです。20年しかたっていないビルが取り壊されてしまうのは、とても日本的です。

この一年は、このスタンダードブックストアと、そのすぐ近くにあった心齋橋アセスという、とてもいい本屋さんが続けて閉店しました。心齋橋アセスは、80年代から大阪の文化を引っ張ってきた書店で、私の小説にも何回か出てきます。心齋橋アセスは、本屋さんが主体の会社ではないんです。社長がもうかった分は文化に還元せなあかんという志の高い、懐の深い人で、本業で儲かった分を文化的な書店として経営していたんですが、世知辛いことに代替わりして方針が変わりました。大阪は今、外国人観光客向けの店ばかりできていて、アセスはドラッグストアになり、スタンダードブックストアもホテルになるそうです。地域の文化として、本屋さんは、重要な場所の一つですが、経営不振以外の理由でなくなってしまうのは、とても寂しく、今の経済的なことばかりが優先される中で街の文化をどうやって維持していくか、難しいことの象徴でもあります。

スタンダードブックストアのフェアで、担当の店員さんが、近隣の地図を売り場に置いて「この街の今はポスト」を作ってくれました。『その街の今は』に書いた場所が、ちょうどこのあたりということで、あなたにとってのこの街の今を、思い入れのある場所だったり、自分の思い出を書いてこのポストに入れてくださいという企画をやってくれました。そこに投函してくださったエピソードを書



き込んでいったのが、この真ん中の地図です。大阪で暮らす人たちがわたしの小説を読んでくれて、そのことによって自分が忘れていたようなことを思い出してくださったり、あるいはここで別の人が書いたエピソードを読んで、ああ、そこに行っていたことがあったとか別のエピソードを思い出してくれたりする。自分の小説が街の一つの結節点というか、小説を介しているんな人がつながっていたり、いろんな人の記憶が交錯していくような場所になることが可能なんだと、この書店員さんの企画で教えてもらいました。小説を書いていくというのは大変なことです。時々インタビューでこの小説を一言でいうとなどと聞かれます。一言で言えるなら何百枚も書きません。そのまどろっこしい何百枚を書く意味が、こういうふうな読者の方の声を聞くことができると、いろんなことを調べたり、街のことを知ったり、知ってほしいという思いを持ったりしてきてよかったと思えます。

自分の小説だけがこういう人の思いを浮かび上げさせたわけではなく、ふだんから多くの人が街にある思いを抱き、いろんな人の記憶があり、思い出があり、生活がある場所というのが街です。一つのきっかけがあれば、本屋さんという場所かもしれないし、別の場所かもしれないし、あるいは小説という形、ふだんは表面に出てこない、個人の中だけにあるものが、つながることができる。この本屋さん自体はなくなりましたが、書店員さんも別の本屋さんで働かれていたり、自分で小さい本屋さんを始められたりして、次のことにつながっていくということがあればいいなという思いを持って、これからも小説を書いていけたらと思っています。

今日はたどたどしい話を聞いていただいてありがとうございます。(拍手)



柴崎友香氏

司会/鈴木慎一郎：それでは、質疑応答に移ります。御質問のある方は挙手をお願いします。

会場発言：智頭から出てまいりました。本日は非常にいい、興味あるお話を聞かせていただきましてありがとうございます。大阪にずっと住んでいると、もう外に出ないのではないかというふうに思ったから、東京に行かれたといった言葉があったと思います。今日は地域学ですので、僕は「アンチ東京」ではないんですけども、なぜ出られたのかなと思いましたので、そのあたりのところをよろしく願いいたします、愚問ですけれども。

柴崎：いえ、すごく重要なことだと思っています。芥川賞の記念のサイン会を大阪でしたときも、大阪の人はすごい距離が近いので、全然知らないおばちゃんに、「何で東京行ったんや」と急に言われたりしました。私はずっと気持ち的には大阪市民だと今でも思っていて、東京はちょっと今いるだけと思ってるんです。いつか帰るつもりで東京に住んでいて、ちょっと長くなっているという感じです。なぜ出たかというのは、一つの場所しか知らなくて、いろんなことが言えるのだろうかという気持ちがあって、別のところで暮らしてみたいと思っていました。実際東京に行ってみたら、大阪のことがよくわかった部分もあります。どっちがいいとか悪いとかではなくて、大阪弁の特徴や、余りにも当たり前すぎて気づかなかったことを、離れることによってたくさん気づいたのは、引っ越して得たことの一つです。

それから、ローカルな地域としての東京はおもしろいんですが、やっぱり中央のいろんなものが集まっている面での東京というものに対しては、ちょっと反発もあります。基本的に地理の勉強をしても、一極集中はよくない、多様性があるって分散しているほうが文化的にも経済的にもいいと考えています。日本はどんどん東京に一極集中が進んでいて、その構造を何とかできないかということだったり、あるいは東京にいるとほかの地域のことは全然見えないんだなと、実感もしました。それを知ってもらうにはどうしたらいいんだろうという気持ち強くなりました。この何年か、今まで行ったことがなかった日本のいろんな地方都市に行くことが増えました。何十年か前はこの辺が栄えていたと聞いたり、実際そのころの建物がたくさん残っていたりします。地方が衰退していくのはしょうがない、

東京だけが栄えるのは時代の流れだからしょうがないと言われているんですが、絶対そんなことはない、構造に問題があってこうなっているのであって、仕方がないことではないというのは強く思うようになりました。

会場発言：鳥取もよろしくお祈りします。

柴崎：はい、よろしくお祈りします。

会場発言：鳥取市内から来ました。初歩的な質問なんですけど、小説になされる風景を選ばれる際に基準となるものについてお伺いしたいです。先ほどお話の中で愛着があるとか、書きたいということは何度かお話いただいたんですが、それ以外に、例えば、私が書かないとこの風景が消えてしまうという使命感ですとか。ちょっと言葉は悪いんですけど、読者受けがいいとか、大阪、東京を舞台にされていましたが、住んでいる人が多かったり、ゆかりの人が多かったり、あるいは憧れの地ということで、舞台にすると小説を手にとってもらいやすいということもあると思うんです。そういうことは意識されますか。また、これから気になっている地域がありましたら、それについてもお伺いしたいと思います。

柴崎：これを書いたら読者がふえるだろうとか、受けそうというのは私は考えないです。だから、むしろすごくおもしろいのに、いいのに見過ごされている、そういうところを書いていきたいと思っています。マーケティング的なことではなくて、自分自身の興味だとか愛着だとか、あるいは取材していったり調べたりして、誰かがその場所に思い入れを持っているとか、それを書くことにしています。

司会：まだまだ質問が尽きないんですけども、時間の関係上、ここで講演は終わりにさせていただきます。柴崎先生ありがとうございました。

柴崎：ありがとうございました。（拍手）

Ⅲ. シンポジウム

司会：13時となりました。これよりシンポジウムを行います。ここから先のシンポジウムの進行は、地域学研究会幹事の村田周祐准教授が担当します。よろしくお願いいたします。

村田周祐：皆さん、こんにちは。地域学部の村田です。本日はどうもお越しくささいましてありがとうございます。

では、ここからは午後の第 2 部になります。「私と街のできごとをえがく―身近で小さな変化か

ら」というテーマでシンポジウムを行いたいと思っております。まず、お二人のゲスト、蛇谷りえさん、そして福田修三さんに講演を 1 時間ずつお願いしております。その後、佐々木孝文さんと佐藤紘一さんを加えてセッションを行いたいと思っております。

今回、シンポジウムのテーマを「私と街のできごとをえがく」とした趣旨を簡単に御説明させていただきますと思います。私たちはどうしても大きなストーリーを描きがちです。無自覚に大きなストーリーにいろんな物事を当てはめて考えてしまう。例えば、私たち地域学部では、地域の人々に来ていただくとか、私たちの地域のこれからをどうするのか、といったようなことを何気なく口にしてしまいます。でも、よく考えてみると、その地域が実際どういうところで、どういう人がどんなふうにいるのでしょうか。そう考えてみると、大きなストーリーでは、実は私たちの生きる場は余り見えてこないのではないかなというふうに思うのです。

そこで今回は、あえて大きなストーリーではなく、身近な小さな変化を出発点とすることで、地域を等身大のものとして描いてみたいということを考えました。とはいえ、口で言うのはやさしいですが、実際には難しいですね。そこで、今回は、身近な小さな変化から地域を描く技法や方法を持っておられる方に来ていただいております。そのお二人が、蛇谷りえさんと福田修三さんです。詳しい御紹介はご本人がお話くださるということですので、ここでは省略させていただきます。

では、蛇谷りえさんにバトンタッチをしたいと思います。拍手をお願いします。（拍手）

講演：

蛇谷 りえ（合同会社うかぶ LLC 協同代表）

湯梨浜町から来ました蛇谷りえと申します。合同会社うかぶ LLC の共同代表をしています。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

まずは私のアート体験から話を始めたいと思います。今何しているのかについて説明する前に、さかのぼって順に話していきます。私は大阪で生まれ、今は 35 歳です。私の初めてのアート体験は多分中学生のときでした。幼稚園のときから絵を描けばコンクールで受賞したりするやいなやゆる手先が器用な女の子だったのですが、中学校になると余り学校がおもしろくなくなり、好きな授業は



蛇谷りえ氏

図工と体育ぐらいでした。絵を描くのが好きだったので図工の時間は結構一生懸命やっていました。

そのクラスでは、ヤンキーと呼ばれる男の子が私の隣に座っていました。ある日、大坂城の絵を画面いっぱいから描きましょうという課題がありました。私は絵を画面におさめるために、「ここから描かなきゃいけない」「色数を増やしたらきれに見えるな」など、いろいろ考えながらやっていたのですが、ぱっと隣を見ると、その男の子は、「先生、画面が足りひんから画用紙もう1枚欲しい」と言っていました。なぜかという、石垣を描いただけで、もう描く場所がなくなっていたからです。その男の子は四つ切りの画用紙に茶色の石垣のブロックだけをいっぱい描いて、クレヨンか何かでブロックの区切りを真っ黒にして、黒と茶色しかないような絵を描いたのです。先生は、その子に画用紙をもう1枚渡しました。授業が終わってみんなで完成した絵を発表すると、その男の子の絵だけがすごく目立ちました。自分の絵はやっぱり画面いっぱい描けなくて、ちまっとおさまるような絵になっていました。自分の絵は、何てつまらないのだろうと、そして、隣の男の子の絵はめちゃくちゃ格好よくて、すてきだなと思いました。そのときに、うまくやろうとか、うまく完成させるとか、上手にすることがおもしろさではなく、人を驚かせたり、「そういう描き方もあるのか」と思わせたりすることが絵を描くということだと思ふようになりました。そういう体験がありました。そこからその男の子のことをすごくリスペクトするようになり、図工のときに、その男の子と一緒に何かをつくらうと思うようになり、自分の真面目さや、うまく描かないといけないという考えがどんどん解放されるようになりました。あれはすごく強烈な出来事でした。

中学校での集団行動が苦手でしたので、高校は、デザインや美術専門の高校に行きたくなり、大阪市立工芸高等学校という公立の専門の学校に行きました。そこでは、主に美術やデザインの勉強をしていたので、より自由に自分の知りたいことが勉強できる機会になったと思います。家族とか学校とか、人と違う外の世界に出ることができたのも、そういう高校の経験があったからだと思っています。

2007年からは私のアート覚醒時代ですが、大阪で生まれ、そういった高校で美術を勉強して、グラフィックデザインも勉強しました。専門学校にいたときは、美術館や博物館、国内外のアートをめぐるのが大好きだったので、アルバイトでお金を稼いではそういったところに行きました。その後、2年間、設計事務所でアルバイトをしながら休みの日にはアート関連のボランティア活動をしたりして、週の5日はがっつり設計事務所で働いて、週の2日はアートに触れるようなことをしていました。しかし、少ないなと思いました。もっと自分の日常にアートがあればいいのになと思いました。そして、「なぜアートを見るために外国に行ったり、東京に行ったりして、こんなにお金を使わないとあかんのやろう」という疑問があって、大阪にもおもしろいものがあったらいいのになと思いました。自分の町におもしろいものがあれば、お金を使わずにアートに触れられると思っていろいろ調べていたら、大阪に当時、2010年頃には、アートNPO団体がたくさんありました。新世界といわれる町でたくさんありました。それを知って、そこのイベントに行くようになり、始めはお客さん、参加者として行っていたのですが、徐々に運営に携わりたくなって設計事務所のバイトをやめました。ボランティアでもいいからスタッフになりたいと思って心を決めていたら、たまたまアルバイトのスタッフを募集していた団体がいました。

それが應典院という谷町9丁目にあるお寺がサテライトとしてやっていた築港ARCプロジェクトというアートプロジェクトでした。2006年に立ち上がった、大阪のアート情報や小さな地域の取り組みの情報を集めて発信するプロジェクトでした。自分はデザインを勉強していたので、自主企画のイベントのチラシをつくらしたりして、広報を担当していました。

そうこうしているうちに、いろんな活動をしている方が事務所に訪ねて「今度こういうイベントあるんだよ」というようなお話を良く聞くように

なり、いろんな活動を知る機会が増えました。「蛇谷さんデザインできるんだったら、今度うちのデザインをやってよ」や「人が足りないから記録をやらないか」など、誘いをいただくようになり、手伝っていくうちに、いろんな活動にかかわることになりました。(この写真で) ドラッグクイーンの格好をしているきむらとしろうじんじんさんは、鳥取でも野点をしています。自分も大阪から鳥取に来たのですが、大阪との関係は今も続いていて、切り離されていない感覚があります。

一番その事務所にいたときにわかったことは、美術館やギャラリーにあるものだけがアートではなくて、「社会においてのアート」というものがあるということです。いろんな取り組みにかかわる中でわかったことなのですが、今振り返ると、当時の自分はただただおもしろくて、「よくわからないけどついていこう」と思っていました。ある日、近くの古びた温泉の店主がふらっと事務所に来て、温泉業界はもう廃れていて、全然お客さんが来ないから、温泉を使って音楽ライブをコーディネートして欲しいという話がありました。音楽ライブは大きなスピーカーが必要で、電気のこともあるから難しそうと思いながら横で聞いていたら、上司がディレクションを手がけることにしました。現場の記録を手伝いに行ったら、音楽家がマイクを使わずに温泉の反響音できれいな音を奏でたライブをしていました。そして、銭湯に来る常連のお母さんたちがそこでベリーダンスを发表或したり、地元の方が古琴の演奏をしたり、若者が聞く音楽ライブだけではなく、いろんな人がその同じステージに上がって発表するようになりました。地元の人も来るし、ライブハウスに行くような若い人もおもしろがって来るし、それをきっかけに廃れぎみだった温泉がすごくにぎやかになりました。子供たちが「ワー」「キヤー」と走り回っていたり、温泉の水を抜いて湯船の中に入ったりして、いつもの温泉と違う非日常的な空間が立ち上がりました。「あっ、こんなことができるんだな」と思うようになりました。これは、ギャラリーでもできないし、美術館にもできないと思いました。この経験で、地域や社会においてアートというメディアの視点で、いつもと違うところにスポットを当てることで、何か違う価値が見えたり、アートを通じて違うネットワークに広がったりするということがわかりました。

いろんな方から仕事を受けていたのですが、次第に私はその仕事に対して文句を言い始めました。

こればかりやっている感じがして文句を言いましたら、「あなたも自分でやってみたらいいよ」と言いかえされ、自分で自主企画をすることになりました。それが 2010 年で、私一人ではなく、現在、共同経営をしている三宅と出会って友人と一緒にやりました。当時 2010 年は、瀬戸内国際芸術祭という関西では一番大きい国際芸術祭が始まる年でしたので、大阪にいた私たちは色んな噂を聞いていました。7 月 19 日からの 3 カ月半、岡山と香川に色んな人が集まるということがわかっていましたので、岡山で何かできないかと考えました。三宅が岡山出身でしたので、地元の空き家再生をやっている NPO の方に声をかけ、駅から徒歩 20 分ぐらいのちょっと不便な離れた場所で古民家を一時的に借りて「かじこ」というスペースを運営しました。かじこはいろんな機能があり、一つは一泊 2,600 円払ったら誰でも宿泊できるということにしました。もう一つは、イベントができるという機能です。2,600 円のところ、持ち込みイベントをすると 1,000 円引きになり、一泊 1,600 円で泊まれるということにしました。そして、泊まるついでに自分のイベントをすることで、居間やリビングが盛り上がり御飯を食べるだけではなくなるような小さなイベントがたくさんありました。瀬戸内国際芸術祭に来るお客さんが多かったので、アートに関する企画もありました。例えばアーティストによる作品紹介だったり、いろんなアートプロジェクトを見に行っている人の感想だったり、またトランプや折り紙が得意な人の展示、地元のアーティストによるラジオ、旅が好きな人による旅の勧め、恋愛遍歴のたくさんある女の子が自分の恋愛遍歴、数々のだめ男について話すというのもイベントになりました。私が興味のないイベントでも告知したら結構人が来たりするものもありました。これで自分はやっぱり「アートがあるから人が集まる」ということは嘘で、鍋でもいいし、恋愛話でもいいということが自分の中で確信しました。他にも滞在制作、アーティストが作品をつくってそれをかじこで展示するというをやったり、泊まらなくても訪ねられるようにしたりしていました。瀬戸内国際芸術祭に行くキュレーター、関係者、それから瀬戸内国際芸術祭はいろんな島を巡るイベントですが、はしごついでにかじこにも行ってみようという人、この古民家が気になっていた地元の人も来て懐かしがっていました。

かじこは自分が初めて企画したプロジェクトでしたが、700 人ぐらいが訪れ、300 人ぐらいが宿泊

して61のイベントが開催されました。最後は、かじこが終わってしまうから一日に2回、1週間に5、6回イベントが開催され、ずっとパーティーみたいな状態でした。自分たちで事を起こすことは、こんなに反響があるのだという実感と勇気が出ました。準備期間で1年弱その地域にいたのですが、始めは地元の人々は、「外の人何かやっているな」というぐらいでした。最後のほうには、「お祭りのみこしを担がへんか」と誘ってくれたり、地域のかかわりが生まれていました。3カ月半でこの感じでしたら、10年やったらどんな風景が見られるんだろうという興味が湧き、もっとやりたいと思うようになりました。

それで、鳥取に移住することになったのです。もともと大阪と鳥取の2拠点生活をしようと思っていたら、そのときの大阪市長選で文化を全部カットしますという市長が当選してしまい、私が勤めていたアートNPO系の予算が全部とまってしまうました。私がフリーランスで仕事をしていたので、仕事がなくなって、ゼロからバイトし直しという状況になりました。そのとき自分がいかに助成金頼りで仕事をしてきたかという反省も含め、やっぱり自分で何か事を起こしてお金をいただくということをやってみたいと思い、大阪を離れて鳥取に移住することを決めました。

初めに会った町は湯梨浜町という、ここから50分ぐらいの鳥取県の真ん中にある町です。駅名でいうと松崎駅の周辺、東郷町のほうです。湯梨浜町は、羽合町、泊村、東郷町が2004年に合併して誕生した町で、人口1万7,000人ぐらいのうち、東郷町は6,000人程度という小さな町です。岡山で片岡八重子さんという建築家と出会ってこの町を紹介していただきました。かじこをやっていたときに片岡さんがふらっと来て、空き家でこんなことができるのでしたら、日本中に空き家がいっぱいあるよと教えてくれました。当時、1年10万円ぐらいで空き家を借りてスペースをはじめた友達いたので、「空き家があったら何かできる」「新築を借りるより家賃代や運営費を考えたら空き家の方が良い」と興味を持ちました。片岡さんはいろいろ紹介してくれて、例えば尾道には改装費も全部出してくれるというぐらい、すごく好条件な物件がありました。近くに月に10万円稼いでいる自動販売機があり、「ここで宿をやったらめちゃくちゃもうかってしまうからやめよう」と思って断りました。そのときに、私たちはただ大もうけがしたいわけではないということが分かり、片岡さんに「何かもう

ちょっとほかにはないですか」と言いました。最後に「ここしかない」となったのが、湯梨浜町でした。

湯梨浜町は、片岡さんの恩師の故郷で、彼女は以前から地元のお母さんたちと関係性を築いて、まちづくり的な活動をされていました。50、60代の女性部のお母さんたちとまちづくりに取り組んでいたのですが、介護だったり、家事だったり、仕事だったり体力的に大変でしたので、外の人間が必要ではないと言われていました。ちょうどそのときに私たちがのんきに「空き家はないですかね」と言っていたタイミングでした。それで、初めて連れていってもらったときに、ご飯会を開いてくれて、お店をされているお母さんたちが自分たちでつくった手料理を持ち寄り、私、三宅、片岡さんの話をすごく一生懸命聞いてくれました。話といっても、かじこではこういうことをやって、かじこみたいなことをやりたいけれども、別に同じではないでも良い、というようなよくわからない話を一生懸命ふんふんと聞いてくれました。とてもいい人たちだなと思いました。そのときは夜に湯梨浜町に行ったのであたりは真っ暗でした。次の日、朝起きて町を歩いてみたら、でっかい東郷池という池があって、東郷温泉という黄色いアーケードが駅前にありました。そして、温泉からちゃんと湯気が湧いていたりして、いわゆる寂れた商店街を歩いたら、昨日会ったお母さんたちが元気に出てきて、差し入れをくれたりして、朝ドラみたいな状況でした。この人たちはこの町で生まれ育って、ここで店をやって、帰るところもここなんだという、小さい経済にすごく感動しました。私は、大阪市の中心生まれで、道端で誰かが倒れていても誰も声をかけないような、都市部独特の感覚で育ったので、隣の隣に嫁にあって、その町で育って子どもも生まれて孫もできるというような長い培われた文化、習慣、歴史みたいなものを少しだけ感じることで、自分もその一部になりたいと思ってこの町に決めました。この町で私たちもお母さんたちを見習いながら生活をつくっていきたくて思ったのが、ここに決めた理由です。

今度はフリーランスではなく、会社を始めることにしました。なかなか物件が見つからなくて、1年間ぐらいは町のお祭りやイベント、お母さんたちの手伝いをしながら町の人との関係性をつくっていきました。助成金にはもう頼らずに、自分たちのペースでやりたかったのです。また、行政の方も来て、すごく見守ってくれました。「ペースがあるんですね」と言われながらやらせてくれて、1年た

ったときに「あんたらに紹介したい物件がある」と1月3日に電話がかかってきました。正月ぼけしながら行ってみたら、今の「たみ」の物件を紹介していただきました。そこに御夫婦が住まれているのですが、もう今年中に息子さんのところに引っ越すので、建物ごと買ってほしいと言われてました。私は賃貸でないと貯金もないし始められないと思って「賃貸じゃ無理ですかね」と聞いてみたのですが、無理でした。当時クラウドファンディングが始まったころでしたので、思い切ってみんなから資金を集め、それをもとに倉吉信用金庫さんが貸してくれました。それでたみが始まりました。

その借金をうかぶが背負うことにしたのですが、会社を立ち上げるに当たって3つの方針をつくりました。

- ① 新しい風景を自由に見るための土台であり、舟である。
- ② 個人の持つ可能性を拡張することで社会をいかに生きるか探求する場所である。
- ③ とどまることなく常に変化し続ける時間である。

この3つをもとにつくられる組織団体として始まりました。今はたみというゲストハウスと Y Pub & Hostel という鳥取市にあるお店の2つを運営しながらグラフィックデザインの企画や制作、それから鳥取大学との研究プロジェクトの運営だったり、アートプロジェクトの運営をしたり、いろいろやっています。

たみの話をするのでありますが、たみは写真を禁止にしています。したがって、ここからは絵で紹介します。オープン当初から写真を禁止にして SNS もしていません。取材も禁止しています。なぜなら一次情報を大事にしてほしいからです。写真を撮ってわかった気になって答え合わせみたいに事前に見た情報をもとに物事に会って行くのではなく、宿なので旅ぐらいは SNS 禁止、写真禁止にしたらどうかと思いました。情報が前もってないと不安みたいなものが重きに置きがちですが、多分、情報社会になる前はもうちょっとピュアな感じ、これに出会って「どうしよう」「これ何や」、そういう感覚で物事を見ていたと思います。

ゲストハウスたみは知っている方もいると思いますが、素泊まりの宿で今は1泊3,100円から宿泊できます。ドミトリイという共同の2段ベッドがたくさんある部屋と個室があります。たみはもと

国鉄の寮を活用しているので、2階建ての結構大きな木造建てで、2階の個室の部分をシェアハウスにしています。当時は5人ぐらいが住んでいました。一、二年したら卒業してまた新しい人が増えるという感じになっています。1階の一部分にはカフェがあります。ここは地元の方がお茶をしにきたり、お酒を飲みにきたり、イベントができたり、宿泊の人も御飯が食べられたりします。泊まらなくても利用できるスペースです。閑散期、冬の間はお客さんが少なく、宿業が退屈になるので自分たちで企画して御飯のイベントを開いたり、展示の企画を考えたり、県内外の仲間たちの持ち込みイベントをやったりしています。他にも地元の方の祭りにコラボレーションしたり、出店したり地元の酒屋と屋台をやったり、シェアハウスのメンバーがホストクラブを遊びでやってみたり、いろんなことをしています。

当時は、私と三宅しかこの町に移住者はいなかったのですが、今は20名ぐらいが近所に住んでいて、カフェ、おいしいコーヒー屋さん、古本屋さん、古着屋さん、今は美容室がもうすぐできそうで、お店も増えています。最初からお世話になっているお母さんたちも「うめやというコミュニティスペースを始めたり、「よどや」という拠点があったりいろんな活動が広がっています。

そして、2012年、4年たったぐらいに、まだ鳥取駅の近くにはゲストハウスが一つもなく、もう出来ても良いだろうという噂はあったのですが、ずっとないままでした。鳥取市の街中ではいろんなアートプロジェクト、個人でいろんな活動をされている方と知り合いになったときでしたので、他の宿泊企業がここで安宿されるよりは自分たちが安宿やゲストハウスをやったほうが絶対おもしろいし、紹介ができる、案内ができるという自信もありましたので始めてみました。それが Y Pub & Hostel です。県外の観光客からしたら、鳥取駅で降りて砂丘に行き、その後出雲大社に行くようなルートが一般的ですが、Yを入り口にして、たみ、松崎、湯梨浜町、もっとディープな鳥取のカルチャーに目を向けてもらえるようなメディアになりたいと思っています。

ここで働くスタッフは大体が移住者で、京都の美大の卒業生や東京で飲食店営業をずっとされていた人がいたり、アルバイトに地元の学生さんが来たり、旅行者として来たけれども一回帰った後移住してスタッフになった人や主婦がいたり、いろいろです。

Y ではいろいろなイベントや交流会をして、常連、単なるお客さんだけではなく、コミュニティーとしてもできつつあります。Yは鳥取の街中にあるのですが、それを利用して智頭、八頭、岩美で活動する人がイベントやりたい、気高の酒蔵さんもYでお酒のイベントをすることで若い人たち、県外の人たちに知られたい、Yで開催することでもっと自分たちと違うお客さんに知ってもらえるという期待を持ってよく声をかけていただいております。そういった持ち込みイベントが増えていきます。

先ほど、柴崎さんの8ミリフィルムの話がありましたが、私はその他に鳥取大学地域学部と連携しているホスピタイル・プロジェクトというアートプロジェクトを鳥取市でして、そこでは展覧会をしたり、滞在制作をしたり、いろんな企画があるのですが、私が担当しているのはアーカイブプロジェクトです。家庭に眠る8ミリフィルムを発掘してデジタル化し保存して活用できる仕組みをつくることを目的に活動しています。これは2016年から始めているのですが、先月、鳥取県立図書館さんにご協力いただき、集めてきた8ミリフィルムの展示をさせていただきました。これまで集めた8ミリフィルムを使って地域の方に映像を見せながらインタビューをして、そこでできた地域の記憶を録音して8ミリフィルムの映像に副音的な感じで重ねて映像作品を作りました。その他にも、個人で保管されていたもの、お家にずっとあった戦後に使われていた段ボール、判子屋でおじいちゃんの代から使っていた道具や個人で大切にされていた物を展示させていただきました。また、「にんげん研究大発表会」という催しを夏にやっていたのですが、これは地域学部の合同ゼミとして「にんげん研究会」を学生たちと運営して、私はコーディネートをしています。

今回、「地域をえがくー想像力としての地域学」というタイトルでお招きいただいたのですが、私がやってきたことは、個人という小さな単位がアートというメディアを使ってどこまで世界を拡張できるかということかなと思っています。メディアというのは新聞、テレビ、ラジオ、マスコミュニケーションのイメージが大きいのですが、それは万人に伝えるものだけではなく、自分の身の丈に合ったメディア、誰かとつながるためのツールとして宿があったり印刷物があったりするのかなと思っています。企画を考える、物づくりをすることで新しい関係性や新たな社会をつくってきたかなと考えています。会社というのもメディアであると

考えていて、一人で何かするのではなく、みんなでやるからできることにこだわってきました。そういう人間と人間の間で生まれるもの、物質的なものだけではなく、状況や体験、その時代に合ったものをつくっていきたいと思っています。私の中学生のときのような経験、それから20代のときの何か良くわからないような体験が、同じ時代を生きるみんなにも体験できたらいいなと願っています。

告知ですが、学生でなくてもどなたでも参加することが可能です。たみ、Y、にんげん研究会、ホスピタイル・プロジェクト、鳥取市、湯梨浜町で大体やっていますので、気になる方はぜひチェックして遊びに来てください。早くになりましたが、以上です。(拍手)

村田：ありがとうございます。では、次に福田修三さんに御講演いただきます。先ほどの蛇谷さんのお話が移住者の視点であるとすると、福田さんのほうは鳥取で生まれ育った視点からお話をいただきます。では、よろしく願います。(拍手)

講演：

福田 修三（株式会社インテリアフクタ会長）

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました生粋の鳥取人の福田修三と申します。

柴崎先生と蛇谷りえさんは、お二人とも関西のお生まれですが、いまは東京で大活躍される作家と鳥取で大活躍される多彩なお方になられておられます。こういう活躍される女性を目の当たりにして驚嘆いたしました。お二人とも、本当にますます御活躍ください。

さて、私は鳥取の鹿野街道という、鳥取城下がつくられたときに整備されたいわゆる山陰街道に暮らしております。かつての鳥取城下の人口は約3万と言われております。3万というと、江戸時代の山陰では大都会であったと思います。その大都会鳥取城下の台所を支えたのが、鹿野街道の外市・内市という商業地区でした。今では安長の卸売市場に機能は集中しておりますが、大正の末から昭和の初めまでは、鹿野街道には数百件の商店が密集しておりました。そのど真ん中に、私の祖父が創業した福田ゴザ店、いわゆる畳の材料商がありました。私はその3代目で昭和16年に生まれました。350年繁栄した地域でしたけれども、現在は都市機能も商業機能もなくなってしまいました。これは時代の流れ、時代の変遷ですね、やむを得ません。けれども私は、戦後の残影のなかで、本当にすご

い熱気のある時代、商売が繁栄していた時代、都市機能がまだ機能していた時代のなかで少年期を過ごしました。

その少年期の思い出をちょっと振り返ってみたいと思います。当時は、本当に町に「におい」があった。智頭街道と若桜街道とでは、「におい」が全然違うんですね。町の「におい」が違うという表現はちょっと異様ですけども、我が街道には生鮮食料品、加工食料品、竹輪屋、豆腐屋、焼き魚、そういう商店が密集していたんですね。それらの商店が 1 市 3 郡に卸していく、町の衆も買い物にやってくる。それは本当に雑踏といいますか、すごく活気がある町だったんです。

当時の鹿野街道は、「におい」で、あっここに来たなど感じるほど、すごく生活のにおいが充満した街だったんです。その喧騒と熱気のある「におい」のなかで私は育ちました。言いたいことは、350 年の歴史を持つ鳥取商人、いわゆる町人や町衆として私が育ってきたということです。そういう表現が私にはびったりでして、近所の悪餓鬼と集って育った男です。

さて、私の少年期からしゃべりはじめましたけれども、私の店は現在では業態も変わり、ざっと 120 年の創業以来の歴史があります。しかし、中小企業、零細商店ですから有為転変がありまして、本当に厳しい試練をくぐってきました。私の父というのが、いわゆる「旦那さん」でして、文化人としては有名な方だったんですけども、実務のほうは……はっきり言って本当にスローモーションなゆっくりした人だったんです。時代の流れもあり、鳥取大火が引き金となって中学 3 年のときに経営破綻しちゃいました。これをしゃべらんと私の後半の地域活動の 40 年がなぜ続いたかとか、なぜ現在も現役でやっているのかということとは語れません。

経営破綻というのは、商店としての機能が全くなるといことです。絶対これは避けねばならない。けれども、うちは遭遇いたしました。そこで少年の私は、人間とは社会とはということを変に学びました。そのなかでも岐路をどうするかということを経験から多く学びました。うちの母親は山のごとく大きな存在で微動だにしない、僕ら子供の前では微動だにしないということ。危機であるのに、兄弟 5 人それぞれに進路は自由に選べと、だから私以外の 4 人の兄弟は国立大学、そのうちの 3 人は鳥取大学のお世話になっています。私は地元の高校を卒業すると同時に、稼業を継ぎました。でっち奉公する状況ではなかったんで、18



福田修三氏

歳の私はおやじの借金を背負って実社会に飛び込んだということです。今から思えば、その苦境・逆境が私の基礎をつくった、本当の教師になったと思っております。

もちろん鬼の債権者は債権を回収するためにうちに来られます。けれども、なぜうちが再建できたかといったら、うちの両親は逃げなかった。つまり、謝って謝って謝って、金はないけれども、いつかはお返しいたしますという姿勢だけは貫いた。それを見た最大の債権者が福田の競売は守るといってくれた。奇跡が起きたんです。だから私が稼業を継ぐと宣言することができました。もしも、親が強制していたならば、今でいう 7,8 千万の借金を背負うということはしませんよ。私が債権を引き受けて稼業に入るといって商品が送り込まれてくるんですね。鬼の債権者が仏になられるんですね。それから、その誠意に対して 1 円でも返金すると世の中は一変いたします。結果的には 10 年間はかかりましたが、棒引き一切なしで完済いたしました。

それから私の第 2 期に入るんです。借金がゼロになったときには 30 代に入っておりました。私は、大学は出ていないけれども、稼業ばっかりの人生は嫌で、団体やサークルといった異業種交流で友人をつくって、社会について、人間について、経営について勉強させていただきました。自分よりも一段も二段も高いレベルの人というか活躍される方々から刺激を受けて過ごした 30 代でした。やっぱり人間努力して頑張るとどんどん応援者が現れるようで、38 歳のときには、大体社員と専従の職人を合わせて 30 名体制になりました。借金は完全に済んだら、30 名の企業ですので、それはそれなりに私の満足感、達成感がありました。しかし私は、それは一つの中継点であるとして、これからの後半戦の人生をどう生きるか、どういうふうにして向かうかということを考えていました。それは、20 年

間の勉強のなかで出会った人々とか講演などで見聞きするなかで人生観が固まってきたということでございます。

東部青年中央会というのがございまして、120名ぐらいの青年経済人の研修団体です。私がこの会長を引き受けていた時に、倒産寸前の会社を再建した経営者の方を講師にお呼びしたことがありました。その方が、会社の利益の10%は社会のおかげだから社会還元していると話されたんですね。その話には、社員の理解がなかなか得られないので難しいという注釈もありました。確かに、インテリアフクタはまだ発展途上ですし、社員の福利厚生を考えると、私の自由勝手に利益の10%を社会に還元すると決断実行はできません。そこで、私自身の所得だったら自由でしようということ、大体40年間続けてきたことがあります。それは、私自身の所得の5%、60代中ごろからは10%を、私の社会活動の資金とするということです。現在も続いております。結局のところ、利益は大事だけれども、私は物欲とか利益を優先する人生を送りたくないというのが、私の人生哲学であります。

では、ここからは私の後半の人生における社会活動について話をさせていただきます。今回の講演タイトルに「伝統文化事業、郷土鳥取美しい自然保護と文化に則した社会活動」と記しています。私の生まれ育った鹿野街道12町内は、江戸時代から結束してきた地域でございます。ここの商業活動は廃れてしまったけれども、いまでも人のつながりは強い地域です。その鹿野街道12町内が交流する団体の会長に私が命じられました。当時の会長の仕事は全く社会的なものではありませんでした。商店街の下請作業、商工会議所の会頭、商店街野球やしゃんしゃん祭りの世話ぐらいのもんです。そんなことで、私はだんだんと欲求不満になりました。江戸時代から350年間続いた商業の町なんだからということで、聖祭りという伝統文化を用いて地域の結束を図ると私は宣言しました。ところが、何1000万円もする屋台(山車)を簡単につくれるわけではありません。まずは、屋台を借りることからスタートしました。屋台を借りる程度ですから、そんなにお金も必要ないですし、これはすぐに成功しました。その余勢を駆って屋台建造運動に入りました。これは簡単にはいかず、結果的に30年かかりました。屋台建造は大体3,000万ぐらいかかりましたし、格納庫も2,000万円かかりました。

どんなに「地域おこし」という美しい言葉で表現されることでも、実際にはそれだけの事業資金

が要るんです。その実現は確かに難しいことが多いですが、やっぱり無私の心で地域社会を明るくする、心豊かにする、そういう主張を熱心に続けていけば共感はず生まれるものです。必ず、こういうことを教えてくれたのは、私をかわいがってくれた300数10名抱える鳥取の経済界の諸先輩たちでした。25歳のときに、福田くん、集団力学というのがある、教えてやるというわけです。つまりトップは断然たる不動の人でなければいけないと。それを理解する腹心としての理解者や同志が2人3人おったら300人は必ず動かせると教えてくれました。実際に私の30名の会社経営でも、3人は私の片腕です。それから地域活動でも、3名の友人がやっぱり私の理解者であり共同者です。

そういったことで、ちょっと自慢話にめいたこともたくさんしゃべりましたけれども、私はただ経済的に満たされたらいいという人生観で生きていないということが伝えたいのです。その一端を別の言葉で、もう少し話させていただければと思います。38歳か39歳のときから心がけてきた、異業種の方々とつき合いが、現在の私の血肉になっております。本当に、人の生きざまとか交流は大事です。けれども、やっぱり勉強には本も大事です。本であれば、2,000年前の老子、孔子、孟子とつき合えるんですね。もちろん、西洋のすごく偉大な人々とも本を通じてつき合っています。

その中に、50年前に亡くなった人ですけども、アブラハム・マズローというアメリカの高名な心理学者がおられます。彼の有名な理論に欲求五段階説というものがあります。それを、私は自分なりに成長五段階説というふうに理解しております。はじめに生理的欲求、まず人間は危機から不安定からの脱出を考えないといけません。次は安定の欲求、生活の安定はないといけません。その次は社会的連帯の欲求。次の四段階目は自我の目覚め、尊厳の欲求に入ります。五番目は自己実現、何をしたいのかということですね。他人がしてくれるのを待つものではありません。自分は何をしたいか、何を興したいか、どういうものを求めて一生を貫きたいかということです。そういったことが教えられた学説です。私は、この欲求五段階説をファイルにして、約40数年間、私の座右の銘にしてきました。本日のためにもう一度丁寧に勉強していますと、彼は晩年に第六段階目もあると書いたそうです。第六段階というのは、自己実現という思想とか哲学というのは超越して、自我の世界に没頭するということだと書いてあります。なかなか第六

段階に入るのは難しいですけども、やっぱり世俗世界を捨てるように人生を貫くと、精神的な視界が広がっていくものではないかなと私自身は感じております。

さて、ちょっといろいろと飛び抜けた話をしてしまいました。ここで本題の、聖祭に出す、我が町内の屋台の建設の話に戻りたいと思います。この実現には、ざっと 30 年かかりました。皆さん、最初から寄附はそんなに集まらないんですね。それでも最終的に約 3,000 万が集まった。この額は山陰一だと思っています。昭和 27 年の鳥取大火で、鳥取中のほとんどの屋台は焼けました。そのときに我が町内の見事な漆塗りの屋台も焼けちゃったんですね。それを再現、復活させるのが私の夢でした。これを 30 年かけて総漆塗り、彫金も京都の一流の工芸師、西陣織をつかって復活させました。ぜひとくだと言われました。けれども、文化というのは、そもそもぜいたくなんです。これまで続いてきた伝統文化を後世、100 年、200 年残していくためであれば、超一流をつくれというのが私の信念です。はじめのころは、金は出さんと言っていた地元の人も、最後は諦めちゃって、手伝ってくださいました。

紆余曲折はありましたが、祭りの当日になると、熱狂的な我が鹿野街道の何百人の町衆がこの屋台に集結するんですね。伝統文化というのは、まるで溶鉱炉の様になるんですね。本当に、その溶鉱炉のなかでは主義主張は関係ありません。人間の心が溶け合うんですね。ここに伝統文化のすばらしさがあるんですね。先祖がつくってくれたすばらしいものです。この極みが夜ですね。夜の屋台は本当にもうすごい雰囲気をつくります。本当に酔いしれるという言葉そのものが、夜の屋台なんですね。

これは参加者の記念撮影です。この写真に写っている鹿野街道の人たち。我が町内にも、一人暮らしの老人は多いんですね。もしも祭りという伝統文化がなかったら、その分断と孤立がますます深刻になる可能性はあるんですね。みんなで真剣に語り合う機会も話題も少なくなっています。これが祭りという伝統文化の力によって、喜んで結集することになるわけです。この写真に写っていないけれども、祭りに参加している人々が多くいるんですね。大体 2,000 の人がお金を出されているんです。学校で集める緑の募金とか、市が協力を要請する赤い羽とかで、250 万の金を集めることはできません。ところが、祭りという伝統文化であれば、みんなが目の色変えて協力してくる。そういう凄みが祭りにはあります。

ここまでお話は、我が鹿野街道の屋台が復活した話でした。実は、我が鹿野街道 12 町内の屋台は、聖神社の大祭に氏子として集まる 14 基の屋台のひとつなんです。次にお話したいのは、自主出版した冊子にも書いているのですが、江戸時代に建造した聖神社の大みこしの復活のお話です。聖神社の御霊（みたま）を乗せる、44 町内の氏子全体として聖大祭の中心的シンボルである大神輿が老朽化して廃棄処分寸前になった時がありました。この時、私はこれを「まちおこし」につなげていこうと思いついたんですね。単なる願望では実現しないので、産官学といいますか、行政の力、それから鳥取大学で民俗学を教えられていた野津龍先生の力をお借りしました。野津龍先生は、当時の鳥取東部の文化財保護審議会のリーダー的な存在の方ですね。そしてなによりも、聖神社氏子 44 町内をまとめる努力。これら 3 つを追求することで、最終的には総額で 4,200 万円が集め、大神輿を復活させることができました。当初は、とんでもないと大反対が多かったんです。けれども、このシンポジウムのテーマにもある「身近で小さな変化」ですね、この小さな変化が 1 万 2000 人分集まると実現するんですね。44 町内といいますと、大体 3,000 戸です。それらを一つにまとめていかないとこの社会的な事業は絶対に実現できないんです。一般論でいったら異常なことです。これはまるでドラマのようでした。

何千万という金を集めるということは、44 町内だけでは難しいのが実情でした。それでも実現させるためには作戦が必要になります。作戦とは、行政の力をどのように民衆の力に組み込んでいくのかということです。ところが、政教分離ですから、行政の立場で神道を助けるわけにはいかない、無理だと簡単に断られるということを勉強しました。それだったらばと、鳥取大学の民俗学の野津龍先生が力と知恵をかしてくださりまして、聖神社の大みこしを無形文化財に指定してもらった。こうなると完全に補助金対象に入るわけですね。さらには、当時の知事だった片山さんも応援すると約束してくださいました。その言質をとって、100 年、200 年の未来に向けてみんなで結束しようではないかと、総会で大演説しました。先祖代々の 300 年も続いてきたお祭りですからね。その一つの恩恵をこうむって、楽しいまちづくりをしようではないかと。先祖代々続いてきたものを、我々が子孫に伝えるのは義務だと。県からの支援は 1,350 万ですから、残りの 2,750 万を何とかして集めなくてはならないと。そうして、鳥取の宝である大みこしが

復活,完成したという話でございます。

何だかちょっと自慢話みたいになってしまいました。けれども,本日はこれまで私の実行してきたことを赤裸々に語ることで,私の人生観,私が考えたことを皆さんにお伝えしたいということでありませう。

さて,現在は地方創生とって,東京一極集中を是正して地方に人や金を分散しなくてはならないという世の中の流れです。けれども,とても簡単にはいきません。政府は一生懸命になって地方創生という美名で「地域おこし」とか「町づくり」といいますが,簡単には進んでいないというのが現実です。実際に動いている「地域おこし」とか「町づくり」の後ろにいるのは政府ではなくて,実際に立ち上がっている人がいるんですね。困ったと言うだけの傍観者ではなくて,実際に立ち上がる人がいる。これが世の中です。私もその一端を担っていると思っております。少しだけ,私の考える「地域おこし」とか「町づくり」についてしゃべらせていただきます。

私が知る限り,結局のところは,「鎮守の森」というのが現在の地域おこしの中心になっています。我々の宗教は自由です。ところが,多くの方が初詣をされるように神道は,私たちの身近にあります。新聞記事によりますと,今年の初詣には 8,000 万ぐらいの方が神社に行かれたそうです。人生の慶事,お祝い事といったら神社は欠かせません。神道の源流には縄文時代から続いたアニミズム,自然崇拝というものが存在しています。その主役が神社であります。民俗風習の精神文化の支柱を神社が担っているのは間違いございません。それらを中心に,地域おこしをしたという事例は県下に幾らでもあります。そのひとつの事例を皆様にご報告いたします。

よく御存じの方もおられるとは思いますが,日野郡根雨町,今は日野町と申します。そこに金持神社というのがあります。小さな田舎の神社です。今から 13 年か 14 年前に,その金持ちというネーミングにあやかって観光協会を設立した。すると,何と全国からもうすごい数の観光客が来たという話です。4 年前に,僕の友人の米子さんが 1 月の正月だけで 20 万人来ると言っていた。あんな山の奥の秘境にそれだけの人が押し寄せて来る。それだけなら,普通の観光の話です。ところが,その観光協会の人々は「もうけ主義」はやめようと,貧乏な根雨町に 400 万の浄財を 11 年間寄付し続けているそうです。今年も寄付をいただきましたと,役場の方

が言っておられました。11 年間,4,400 万ですよ。問題は金額だけではないですね。普通の町の人が,自ら立ち上がって熱い心で愛する郷土のために「地域おこし」とか「町づくり」をやろうという心ですね。その心を私は感じるんですね。その土地の歴史,伝統,先人がつくられた宝物を大切に,いまの時代に掘り起こして,それを「地域づくり」につなげていくべきだと私は思っております。

いろいろと飛び跳ねた話をさせていただきました。最後に,私が仲間らと真剣に取り組んでいる現在の活動についてお話をさせていただきます。鳥取市民の憩いの場であり,私自身が愛する樗谿公園に大宮池という池があります。その池に外来種のオオカナダモという藻が大発生しています。オオカナダモは全国各地で駆除されているし,樗谿公園でも駆除せんといけんという人は多い。ですが,やはり立ち上がる人がいなかったんですね。そこで,我々数人でお金を出し合って,3 トンの藻を回収しました。これから,湖山池や多鯰ヶ池でも,この藻が大発生して社会問題になるかもしれません。政府や役所にすぐに頼るのではなく,やはりできる範囲で私たち自身が立ち上がって「地域づくり」をやるのが大切だと思うのです。

私の 40 年間の活動について一気にしゃべりました。愛する郷土鳥取の心豊かな町をつくるために,また子孫に誇れる鳥取を引き継がせるために,生涯現役で,これからもまだまだ活動が続けていこうと思っております。皆様,どうぞご協力をよろしく願います。御清聴ありがとうございました。(拍手)



講演の様子

村田: 福田様,力強いメッセージある講演をありがとうございました。では,後半の進行は,一緒にコーディネーターを務めている稲津に交代させていただきます。では,よろしく願います。

稲津秀樹：地域学部教員の稲津と申します。よろしくお願ひします。後半は鳥取県立図書館の佐藤紘一さんと、鳥取市の教育委員会の佐々木孝文さんから、コメントを頂きます。

少し補足をさせていただくと、蛇谷さんに関してはお話にもあったとおり、街なかに拠点を置いた「すみおれアーカイヴス」にて、8ミリフィルム映像の収集活動もされています。また、その映像に地域の方々が「声をそえる」形での展示企画も立ち上げられていて、県立図書館との連携も行われています。福田さんも、『因幡国2,000年よもやま話』という地域の歴史絵巻を郷土資料としてまとめていらっしゃいます。

このように「街」を題材としながら、私たちにとっての地域、ひいては生活の蓄積とは何なのかといった問いが、それぞれのお立場から発せられています。蛇谷さんからはメディアによって、人間の可能性が拡張されるというお話がありました。その可能性が集積している場所が、まさに図書館という現場だと思います。県立図書館では、私たちの地域学研究会第10回大会とも連携した企画が、同時期に行われています。図書館からは「地域をえがく」営みはどのように見えているのか。そして「えがかれた地域たち」はどのように残されるのか。図書館という現場で、どういったことが今課題となっているのか等のお話をいただけるのではないかと思います。

佐藤さんにマイクをお渡ししたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

コメント

佐藤 紘一（鳥取県立図書館郷土資料課学芸員）

御紹介いただきました鳥取県立図書館郷土資料課の佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。

本日は、コメントということで大分重責を担ってしまっているんですけども、6月頃にこの話、同じ時期に企画があるということと、情景ですとか身近な風景、そういったものを個人の記憶ですとか地域の姿としてどうやって考えていきましようかということ、ミーティングさせていただく機会がありまして、相互に後援という形で協力をさせていただくと、その中で私のほうも担当の職員としまして、こちらのほうに登壇させていただく機会を得たということでございます。

先に、蛇谷さんと福田さんに関しましてはそれぞれのプロフィールを話されておられましたけれども、私自身、北部九州の方、福岡ですとか佐賀のほ

うで大体生活をしてきまして、鳥取に来ましてまだ4年と、日が浅いとも長いとも言えないわけです。

そういった中、今、投映しておりますけれども、「鳥取の文学の情景」を生み出している風景と旅、旅とは作家であったり、また地元に住んでいる皆さんの人生の中の旅であったり、旅というのはいろんな文脈で使われる言葉になっておりますけれども、こういったものを今回展示ということでさせていただいております。私自身も鳥取の風景というのはまだまだ多くを見たわけでもありませんし、こういった皆様の前でお話しできる内容がどの程度かわかりませんが、まずは、企画展示の特別資料展の説明をさせていただいた上で、「すみおれアーカイヴス」さんですとかそういったところにつなげていけたらなと思っております。

また、最初にいただいておりますお時間15分ということだったんですが、本日もう少し長くて結構ですよというお話もいただきました。少し早口のところをゆっくりする程度になってしまいます。準備したものは変えられないということがちょっとありますけれども（笑声）。

まず、郷土出身文学者シリーズ特別編というものがありまして、皆様お手元にチラシを入れさせていただいておりますが、物販のために入れていたというよりは、その1枚が小冊子というものの姿を提示しているということで、見ていただければと思います。今までにこういったものをいませうということの御案内をします。

それから、資料展示の趣旨の説明、文字・活字文化の日に触れておりますが、その辺についてももう一度振り返ってみたいと思います。湖山池の事例を少しだけ文学の作品から触れてみまして、今回の大会のテーマ、繰り返し述べるところとしては、身近な小さな変化とが副題でありますけれども、そういったところとの対比でかかわるところをお話しさせていただいて、図書館のPRの時間をいただくような形になります。ただ、これも地域学で問題になっている地域課題というところに図書館はどうかかわっているかということでの紹介になればと思っている次第です。

では、早速ですけれども、『とっとり文学の情景』を出版させていただいております。これまでに11巻で13名の文学者、1名徳島出身の方がいらっしゃいますが、鳥取ともゆかりがあるということで13名の方を紹介しております。文学者は表現する情景ですとか、景観の描写を事細かに書かれる方ですとか、味わいのある表現、雰囲気ですとか、実

は昨日当館でも講演会を催しまして、文芸評論家の川村湊さんに鳥取に御来鳥いただきまして2時間にわたる講演、質疑応答に答えていただいたところでした。

川村さんは北海道の御出身でして、そちらと鳥取の、風だとか雰囲気といった要素になるもの、さまざまな要因を上げられて、そういったものも非常に地域を語る上では大事だと、まさに先ほどの福田さんのお話でありました街道筋の「におい」の話も同じようなことが言えるのかなと思ったところでした。

ちょっと文章を読むだけになりますけれども、鳥取県を舞台とする作品で、著名な文学者や郷土出身の文学者が多数の文学表現によって表現されたものがあります。これによって意味づけられた風景の場所があるのではないかなというところで、一種の写真集の形でこの冊子を作ったわけです。表現された情景に言葉と風景地の写真で紹介したものになります。

これには前段階がありまして、実は平成27年の3月に、まず「砂丘文学」というのを東部に当てはめまして、鳥取県の東部です。それから、「大山文学」を西部のほうに当てはめた内容で1冊を設けたところだったんです。その年の11月にはその普及啓発を兼ねた展示をしたところがあります。

私、図書館のカウンターで今サービス業務をさせていただいておりますけれども、いろんな購入をしていただける方、また手にとって冊子を読んでもいただける方、また関係者の方からぜひ中部地域も入れてもう1冊新しく作ってもらえないか、というお言葉をいただいたんです。

文学の情景というタイトルではありますけれども、地域にはいい姿だとか、思い入れのあるものというものをしっかりと1冊にまとめたものを作っているのは何かすごくいいなと思っていただいたのではないかと。ある人はまたこれを買って東京の友人に渡しますよとって2,3冊買われていく方もいらっしゃって、いろんな使い方がある中に利用価値を見出しているのかなと思ってるところです。

内容としては中部地域を「温泉文学」とくくりをつくりまして、増補版という形での刊行をさせていただきました。この普及、啓発も兼ねた展示を今年度1年越しにしているというのが本来のところになります。

この展示は、小冊子があった上での普及、啓発の展示なんですけれども、単純に小冊子のPRだけで

はありません。当館では文字・活字文化の日の振興を図るための事業というのを県としての取り組みの中で図書館が担っている部分ですけれども、記念事業を年に1回行っております。この中で特別資料展を行っているということになります。

これは10月27日が本来は文字・活字文化の日に当たりますけれども、近縁の11月などに主に展示を開催していると、今年は少し遅れまして、11月の19日、先日から開始をさせていただいております。

その後、近年の内容、この文字・活字文化の日の内容ですけれども、決して文化とかそういったものだけではありませんで、平成29年には鳥取の文芸誌、これは完全に文化ですかね、文芸史というもの、郷土文芸誌を味わいましょうということで、手当たり次第といえますか、館藏品に限ってですけれども、多くの戦前戦後にわたる同人誌のようなもの、非常に文学作品が多数あります。

鳥取大学の、例えば今現在どういった研究会等があるかどうか存じませんが、詩や文学を営んだ、活発にされた学生さんもいらっしゃいました。そういった方たちが当時鳥取図書館に寄贈をしていただいたような大学の研究会雑誌のようなものも、この時には展示をさせていただいたことを覚えております。

そして昨年は、活字資料から見る旧制中等学校スポーツ史ということで、スポーツを取り上げたいということだったんですね。これは来年東京オリンピックがありますけれども、今年展示をするよりは、更にもう1年前に少しやってみようということでした。残念ながら、余り入りはよくなかったというのがありますが、こういった中で活字に直接関わらないテーマも含めて事業として展示をしてみました。

平成29年には講演会を催したということがありまして、30年はまた違うテーマで講演会をしてということで、講演会自体はこの記念事業には直接はかかわっていないと。直接かかわるところでは記念関係事業としてくくるといようなことにしております。

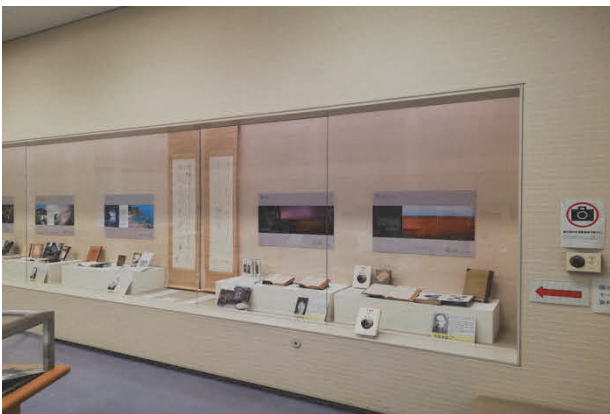
今年の一つ関連事業というくくりで講演会を昨日したということになります。今年、鳥取を旅した著名文学者、そして人生の旅路の中で影響を受けたでありましょう郷土出身文学者の表現した文学情景について、描かれ方ですとか捉え方というものを展示を通して御自身の方に引きつけてもらいたいと。それを契機にしてもらえればいいかなということで、実際の展示の中にテクニック

的なところは全く触れておりません。小冊子で取り上げた大変素敵な写真がありますので、それを大きなパネルに仕立てまして、自分で読んでもらって、「ああ、この風景はとていいな」とどれか一つにでもいいと思っただけならば、それが一つのヒントになるのではないかなということまで準備をしております。

書き手と読み手の関係によってさまざまに結像される地域の姿というのを考えてもらいたいということで、当然書き手、作家の皆さんが表現されるものとその読み手の、私も読み手でしかないわけですが、やはりそれぞれにイメージできる像が違ってくると思うんですね。

今回、お座りの皆様それぞれに全く同じものというのは、やはり今までの経験、生活のスタイルも違います、違ってくるんだろうと。それがその違いも含めて、とにかく自分のことに引き寄せて考えていただく機会になればなど、そういう展示の趣旨であります。

写真は1枚だけですが、これ（下図のガラスケース中の右上の写真）は砂丘です。砂丘の場面。有島武郎が鳥取砂丘にやってきました、これは大正12年になりますけれども、砂丘に来て、砂丘といましても今の鳥取砂丘ではありません、浜坂砂丘、どちらかという千代川沿いから入った方が近いですね。そちらの方の砂丘地に行って歌を詠むということがあります。この後、実はひと月余りして有島自身は死んでしまうわけです。これは文学界では非常にセンセーショナルな情報が飛び交ったために非常に鳥取砂丘というのが社会一般にも固有名詞として非常に知られていくと。私自身も決して専門の話ではありませんので、一般の読み物を確認しますとそのように一応紹介されているということになります。



鳥取県立図書館展示室の様子（佐藤氏提供）

隣に少し紫色のパネルがあります。これが有島なので、そのもう一つ隣ですが、これは与謝野晶子が、明星という雑誌を与謝野鉄幹（与謝野寛）が作って、その奥さんになるわけです。与謝野晶子が昭和5年に有島が亡くなってから7年後に鳥取に参りまして、そこで同じように砂丘で和歌を詠むと、短歌を詠むというストーリーがあるんですね。

その話は一般的には与謝野晶子には有島武郎に非常に思い入れのある感情があるということなので非常に鎮魂歌のような歌を詠むと言われているということなんです。それとは別にまた砂丘に対する和歌がまた幾つかありまして、そのうちの一首が軸装にされたものを当館では所蔵してまして、右の一幅が晶子の和歌が書かれたものになります。隣の方がこれは与謝野鉄幹、寛の方ですけど、そちらのものになります。

こういったものが鳥取によすがとして残っていることは、なかなか知られていないので、この機会を通して知っていただければと思います。

こちらは情景地をめぐる作り手と読み手の関係性ということですが、いかんせん文学の細かい研究的な話ができるわけではありませんが、簡単にくくっていくと、こんなことが言えるのかなということ非常に簡単に書いておるだけですが、作り手というのはやはり表現者ということで、鋭敏な感性をやはりお持ちであろうと思います。

今回柴崎先生のお話を伺っていても、非常に個々にテーマをやはり持たれて作品を仕上げているというのは、私も今日改めて認識をさせていただいたところです。表現力と指向性に何らかのテーマとかの関連性が入ってくるのかもしれないですが、そういったものが作り手としては、まずあるのではないかなと思います。

そして読み手としては、作品世界にどれだけ入っていけるかというようなところ、やはり感受性はいかんせんここにあるわけですね。文学作品を読んで深く感動し、涙を流すような方もいればさっさとドライな感情で同じ作品を読まれる方もいらっしゃる。これはもう個々の感受性はまちまちであることは現にあるわけです。

それから、情景地との親近性という言葉にしていますけれども、一番下のところに書いていますが、実際に例えば、この大学の後、湖山池の話非常简单にしますけれども、この湖山周辺、あるいは湖山にお住まいの方に関しましては、非常に湖山池というのはなじみのある生活の一部というところに感じる方もいらっしゃるし、単純に地名として

湖山というのがあって、その背景に湖山池があるんだなという程度の理解の方もいらっしゃる。

ただ、居住地である側においては湖山池という存在の認識は非常に強いだろうなと思います。それから、鳥取大学の関係者の皆様も、例えば教員の皆様、教職員の皆様、学生の皆様についても湖山池というのは地域のシンボルだなというのは感じたり、御友人と例えば学生の皆さんが御友人と青春の何か一場面がある可能性もありますね。

そういったことも含めて身近に感じやすいだろうと。それから全く外の人間、私は、鳥取に来るまでは湖山池という名称さえも存じ上げませんでしたけれども、採用試験で鳥取へ来たときには湖山池というのは非常にすぐに目につく、こういうふうに紹介される池なんだということを思った記憶があるんですね。

今仕事でいざこの地域のことに触れる、郷土資料課というところで郷土にかかわる歴史や文化、自然についての資料の相談を受ける場合には、やはり湖山池の歴史ですとか文化、そういったものを知ることができる資料はありませんか、活字資料、それからもっともっと昔の墨で書かれたような時代の資料、そういったものを直接見てみたいんだという方がいらっしゃったら写しだったりしますけれども、そういった地誌というものであったり、そういったものを御案内して見ていただくということがあります。私は外縁者として、相談いただいた方の対象との親近性を考えるわけです。戻りますけれども、互いの関係性、作り手と読み手の関係性、そういったもので情景の表現に対する感度に差異が出てくるというのは当然あるのだろうということがここで申し上げたいことです。

では、湖山池についてですけれども、『プラトニック・ラブ』（志賀直哉）という作品があって、ちょっと言いわけがましくなりますが、文学自体はちょっと専門ではありません。ですので、一般的な評論の文章を読んだところのことだったり自分なりに展示の準備をする過程で私自身が読み手として感じたものだったり、そして私もまた鳥取に今住んでおりますので、居住者としてこう思うなということだけの説明になります。

昭和元年の作品ですね。実際にはまだ改元前の大正15年の作品になりますけれども、朗読は決まらずにうまくありません。「鳥取の手前の湖山池、この辺の眺めは広々と殊に美しかった。湖の水は一面に雪を含んで薄墨色に凍っていた。岸に近く寄せ

た波がそのまま弓なりに凍っていた」とこういったことが書いてありますが、湖山池に当時の山陰線に乗って三朝温泉ですとか東郷の温泉の方から鳥取へ向かって走っている汽車に乗って移動中に車窓から眺めた風景になります。そのときに湖山池の風景、ただとても美しかったと、湖の湖面は雪を含んで色合いとしては非常に暗がちな色に見えたということだと思います。ただ、弓なりのその凍った波紋が凍っているように見えた、その次のくだりもカラスが遊ぶ場面ですとか、柳が垂れているようなそういったところの情景があるわけですが、またこういったところで最後に、「餌などあるわけではないのだから遊んでいるのだろうと私は考えた」と。この時期、冬の時期とても湖面の近くのところに餌なんかない、けれどもカラスがこういったところに来るのはきっと遊んでいるだろうなということをつたこの短編の『プラトニック・ラブ』というもので一文、これは大体文末のところに近いんですけども、文末のくだりのところでこういった表現で、目的地であった東郷の方から帰って行くというところで見た風景が描かれているんですね。

これだけ読んで、先ほどの感度が低ければやはり身近には感じないわけですね。やはり感度が強くなる、身近に感じられればこの湖山池のシーンというのは、ああ、そうだなと納得感が得られたり、少なくとも今度ちょっとこの冬の時期寒いけれども一回歩いて見てみようか、散歩でもしてみようかなと、そのように感じたり、いろんな思いがめぐってくるんだろうと思うんです。そういった思いがそれぞれあるというのは個人の感情ということであるかと思いますが、ここでは記憶ということになぞらえております。

こういったものを今回のテーマですが、「気づく」というのが大事で、その後どうするのかということも含めてですけれども、語らいなんかを通して共有するというのとは一番シンプルな形、もちろんアート表現等々があるということですね。アートを通してまた語っていく機会を創造していくということもあるだろうということですが、これが共有されていくとおのずと地域の記憶になっていきますよね、という話であります。

それは実際にこのような仕事をしていて文化的な行政ということにかかわりますと、地域の姿の把握、それが文化的な景観として継承されていくということにもつながっていくわけであり、これが例えば鳥取県であれば智頭の林業景

観というものが既に指定はされておりますけれども、重要文化的景観というようなもので語られるわけです。これは法律できちっと定まっているわけですが、例えば、鳥取ですと仁風閣のような久松山の下にあります洋風建築、こういったものが例えば文化的な施設建物として有名であったり、倉吉であれば重伝建、白壁の土蔵群、そういったものが、ああ、なるほど文化財だなとイメージが付きやすいものかもしれません。ただ、文化的景観という非常に私たち暮らしの中で営んでいるいろいろなものが一つの景観を形づくって、それが一つの指定案件になるということが最近出てきているということです。こういったところも実はこういった語られていく地域の姿、共有されていく地域の姿、活動、そういったものと隣り合わせにあっていいかな、一緒に考えていくところがあってもいいかなと、決してそのまま同じだとは言いませんけれども、近い関係として一つあるので、そういったところの成功事例とか地域のまちおこしに使っているということも当然あるわけです。そういったところで知っておいてもいいのではないかと考えております。

この情景がつなぐ地域の記憶というところで、砂丘の事例ですけれども、先ほど紹介しました有島武郎の「砂丘詠」と一応ここでは名づけましたが、短歌を詠んでいるんですね。「浜坂の遠き砂丘のなかにしてさびしきわれを見出でつるかも」という歌を詠んでおります。これが大正12年です。これに対しまして、与謝野晶子が鎮魂歌を歌うということになるんですね。繰り返しますけれども、有島が亡くなったときに鳥取の砂丘というのが一般的に社会的に認知されていくような過程をたどるわけですが、郷土文化の多くの文化人が有島ですとか与謝野夫妻を砂丘に案内をして、そこでまたやはり思い出の歌を詠んだりいろんな活動が砂丘地ではめぐらされているわけです。

そうしますと、砂丘というのは鳥取の郷土の皆さんの中でも文学作品ですとか日常の表現の中に表出してくるという頻度が上がっているわけですね。ここでは事例としましては田中寒楼だとか枝野登代秋だとか、そういった方たちの砂丘に関する歌なり表現がありますので、名前だけ上げておりますけれども、そういった砂丘を詠んだ歌だとか作品が増えてくる。中には砂丘というものが思索の対象として単に作品があるとか見て楽しい、「観光いいね」だけではなく、深い思索の対象になっていく、そんな表現をしている文章とい

うのも出てきます。いろんな人たちが感情を寄せていく場ということになっていくんだろうと。

これは、このもう一つ先に結実するものがあるのでこう表現をさせていただいたんですけれども、今回写真を準備できなかったんですけれども、明治100年の記念事業で鳥取県では県民歌の作成というのが行われます。その中の応募作品の原稿を当館で所蔵しております。それを1ページ1ページめくっていきますと、やはり今でいう大山ですとか温泉、日本海そして砂丘だとか、湖山池と書かれている歌詞を見るときっとこの人は東部の方かなと、弓ヶ浜と書いてあるのでこの詩は西部の方がきっと書いたんだなと思うようなものがあるんですが、往々にしまして明治100年ですから1867年で100年ですから1967年、8年の事業の段階で多分に砂丘、日本海、そして大山というのが一般的な共通認識として恐らく歌い込まれるキーワードとして出ているというのはこれは押さえておいていいのだろうと。そういったことから振り返ると感情を寄せる場ということと、ここではあえて申し上げていいのではないかなと思っております。

地域について語っていくということで、図書館としてのかわり方を少し、事業説明とはちょっと違うんですけれども、この事業がどういう地域の課題に込んでいるかという着眼点で見ていただければと思うんです。図書館というのも社会的な基盤であったり、社会的支援というところで、今現在、単に情報館というような役割を既に超えて多方面での活動は行っているんですけれども、全てに対応できる、しているというわけではありません。やはり幾つかを選んで、選択的にそこに手を伸ばしていく、またかかわっていくということがあると思います。今現在、幾つかは、今日書いていないものも沢山あるんですけれども、単純にお伝えしやすいものとしては、学校支援というものがあります。小・中・高いろんなところの学校図書館に向かって協力をしていく、支援をしていく。

また、そういう支援ではなくて、例えば大学の附属図書館と図書の貸し借りができる状態での搬送ですとか、お互い機関は違うけれども所蔵している図書資料等を貸し出しするような協力というのはしているわけですね。

それから、医療現場、医療現場は当然、専門的な図書がないと、先生方は間違った医療を行うわけにはいきません。個々に研さんはされているわけですが、大学の図書館などと違って、やはり

専門の図書ですとか、また、介護ですとか、看護関係のほうの資料になると、また直接の医療行為にかかわるテキスト以上に手元にないということがあったりするそうなんです。そういったものを図書館では図書として提供ができるように、関連の資料を所蔵するということをして、いつでも見ていただけるようにする。同じようなことが、福祉ですとか各企業のかかわりの中でもしているわけです。例えば、それとはまた別の方向で、外部への出前図書館というのをしております。

例えば、尾崎翠の「新秋名果」という詩があります。こちらは岩美出身の作家なわけですが、この方の詩を、今はポップソングを歌われている方がその「新秋名果」を歌うわけですね、現に歌っておられます。つい9月でしたか、樗谿のグランドアパートでコンサートがありまして、ライブといえますか、全くポップソングのライブ会場なんですけれども、図書館はそこに、単に尾崎翠だとか、そういったキーワードだけではなくて、もちろんその主催団体との関係もいろいろあるんですけれども、ライブ会場に出前図書館をするというようにすることもさせてもらっています。

それから、サポートが必要な家庭を応援することが社会的な課題としてあるので、それを図書館としてどう拾い上げていくのかということで、居場所をつくって、サードプレイスになることによって、社会的な弱者や、こういう表現をするというのがまた問題ではないかということもあるかもしれませんけれども、現に非常に難しい立場にいる人たちに支援ができるような形、場所を提供するだけになるかもしれません。そういった何らかの活動の手助けになるという、そのためのスタートの場所、もしくは逃げる場所、いろんな場所としての図書館のあり方を提供しているということになります。

これは、皆様の日常では、今、学生さんであれば鳥取大学に講義を受けにいき、そしてレポートを書き、いろんな研究をされるわけですが、そういった方が、そういったというのは、サポートが必要な事業の対象となる人たちは、図書館が、日常の生活の場にもなるということなんです。そういったいろんなところを場とされている人が、おのずと世の中には沢山いるということの一例でもあります。

それから、今、郷土資料のほうで進めておりますのは、デジタル化というものも行ってあります。資料のデジタル化です。こういったものも、会場の表

の机に置かせていただいているんですけども、いろんな古い資料ですとか、また、決して古くはないけれども、もう戦前、戦後のなかなか資料の残りの悪いもの、そういったものも図書館にありますので、こういったものを身近に使っていただけるようにするために情報をどんどんと発信して、いろんな活動に使っていただけるというためにデジタル化を進めております。

そして、最後のところですけども、図書館で活動されておるいろんな団体、直接図書館にサークルはございませんし、前身である「鳥取図書館」の時のような形で文化活動サークルは今ないので、ただ、いろんな団体がいろんなかかわりの中で図書館を使っているという状況です。先ほど御報告いただいております蛇谷さんがかかわられる活動、「すみおれアーカイヴス」になっていますね、こちらは2019年、「記憶の鳥取MAP」というのをつくる事業、イベントの立ち上げされておりますけれども、参加者にとっての地域のその記憶をプロットして、地図上に落とししていくようなことだとか、いろんな形で地図をつくるということをされております。博物館の中ですと、例えば、これはイギリスなんかでも認知症だとかいろんな療法の中で活用するテクニックではあると思うんですけども、それを地域の記憶を残していく、もしくは個人の記憶を喚起するようなことで使っていくという手法としても、ああ、こういう方法があるんだなと思って、やはりアートというのは面白いなというのを思った次第ですが、その記憶をたどるための、本当にそのとき、この場所にそういう建物があつたかなとか、こんな建物があつただけでも名前がわからないんだよ。そういったものを、裏をとるための活動で、古い地図ですとか電話帳ですとか、また新聞にそういった記事が載っていないかですとか、いろんな形で図書館にある資料を使っているという状況です。また、相談を受けながら職員がその相談に返していくということもさせていただいております。

そして、先ほどの報告でありました「声をそえる」という展覧会への協力です。具体的な協力は余りないんですけども、会場を使わせていただきながらきちっと運営をサポートさせていただくということになると思うんですけども、こういった形で展示室を使わせていただきました。今日は本当は沢山写真を御提供いただいている、私の報告の中で使わせていただく話をしていたんですけども、時間が15分と伺っていましたので、写

真を割愛してまいりまして、作られたパネルがこうあるんですね。ここに8ミリの画像、映像と音声を重ねた、そういう制作品としての投映資料をつくられて、これを見られる方がいる。それぞれのお宅では思い入れがあるもの、そういったものを展示をされます。こういったガラス一面の展示ケースがありますので、同じように関連のものを並べられて、この会場では、通常音声を流すことはしないんですけれども、音声を非常に大きく流していただきまして、部屋に入ることによって、これを受けとめる空間にちょっとアレンジを、「すみおれアーカイヴス」の皆さんにはしていただいたと、非常に面白い企画で、2週間ほどながら、200名には満たなかったんですけれども、図書館としては非常に反響があったところです。ここに机があるんですけれども、ここに図書館の貸し出し資料ですとか、それから事前にいただいていたレファレンス、資料相談で使ったような資料だとか、そういったものを確か置かせていただいて御利用いただいた。プロジェクターで映されているんですけれども、スピーカーもあって、本当に白い壁面の壁をスクリーンに見立てて、見ていただくという形になっております。パワーポイント終わっちゃうんですけれども、他に持ってきた写真があったと思います。ちょっとお待ちください。



「声をそえる」の展示風景（佐藤氏提供）

著名な文学者が残した作品というのは明治、大正、昭和の初期といったような古い作品が多いですけれども、それだけではありませんよね。今日の基調講演をいただきました柴崎先生もそうですけれども、今現在も作家の皆さん新しい表現をされておられます。

そういったものも含めて、往々にして古い風景が多い図書館資料としては、こういった鳥取駅の

写真ですとか、先ほどの街道筋の様子ですね。流しているのは、大体大正ですとか明治の末年ぐらいのイメージだと思っていただければいいですけれども、このような赤ちょうちんが吊るされつつ左右に店がありまして、そして、人が往来するという、その筋々には商品も並んでいるというイメージがつくと思います。これは、それこそ鹿野街道です。それから、鳥取の若桜橋という、ちょうど川が市内を流れていますが、そこにかかっている橋があります。往来筋です。これが鳥取の停車場、駅の前の空間、人力車などがあるわけですね。こういった空間、こういったものを図書館では見ていただくようなことができたりしますので、ぜひ利用いただければなど。



*いずれも鳥取県立図書館所蔵資料より転載

年配の方の記憶と、今、我々、私ももう決して若くはありませんけれども、大分年の差があると、そのとき見てきた情景は、やはり違うわけです。それをつなぐものとしても、こういう映像資料や当時書かれた文章のものを見比べるというのも一つのいいものかなと思います。(絵葉書を示し)これはすり鉢ですけれども、これも浜坂砂丘の方ですね。こういったものがあると、浦富海岸があったり、これが湖山ですね、湖山池の風景ですね。これも湖山池です。全く今と大きく違うのは、やはり池の周辺、道が全くありませんよね。これが三朝の温泉ですね。今もっと温泉地は広がっていると思いますけれども、こういったものがあると、これは大山です。「錦海の夕照」のとありますから、中海の米子市寄りからの景となります。出雲富士と呼ばれる、峰が非常に綺麗だということで、美しいこの大山が、雄大さが感じられるものですが、それから、岩美の方の温泉街というのは、こういったものがありますということであり、概要だけをちょっと写真で説明しました。



*いずれも鳥取県立図書館所蔵資料より転載



時間も大分来ていまして、特にコメントというのが十分でないですけれども、記憶ですとか、それを共有することとか、個々に当然感じるものが違う。それを共有するツールは何だろうとか、そこには場が必要だとか、そういったことを実践している方たちがいるというのは、こういった資料を所蔵していて、使っていただきたいなと思っている図書館としては非常にありがたい存在だと思っています。

実際に手を伸ばして取材に行き、音声を録音して、関係者の方に来てもらうというのは、なかなか図書館は苦手な分野でありまして、自分たちのほうでできるということではない、しにくいところがあります。そういった方たちともつながれる。また、その活動を支援できれば、支援というところがまじいのでしょうか、一緒に、同じスタンスで取り組んでいければいいというのが、担当者レベルでの思いにはなると、そういった中で、このコメントという形で終わらせていただきたいと思います。御清聴ありがとうございました。(拍手)



佐藤 紘一氏

稲津：佐藤さん、ありがとうございます。書き手と読み手の関係に着目されながら、図書館で所蔵されている資料ですとか、蛇谷さんの展示企画のことですとか、様々な点と点をつなぐような、コメントをいただけたかと思います。

引き続き、佐々木さんからもコメントをいただきます。佐々木さんは同志社大学文学研究科を修了され、近世・近代の文学や地方都市の都市計画に関する論考を多数執筆されておられます。今回は、福田さんのお話にありました鳥取の街並みの形成について、どのように地域の情景と人びとの経験をつなげて考えていけばよいか、そうした観点からコメントをいただけると期待しております。どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

コメント

佐々木 孝文(鳥取市教育委員会文化財課課長補佐)

肩書で鳥取市の文化財課とついていますが、他の皆さん、佐藤さんと違い業務で来ている訳ではないのです。私はもともと博物館の学芸員をさせて頂いて、平成16年から文化財課の仕事をしていますが、今日の話は業務ではなく財団の研究者としてずっと継続しているものです。藤井先生にも御指導いただきながら、ずっと続けている研究について話をさせていただきます。

先ほど佐藤さんから有島武郎の歌碑の話がありました。有島武郎は、ちょうど鳥取砂丘であの歌を読んだ年に自死するのですが、実は、鳥取以外での講演は、その年全部断り鳥取だけに来ています。これはなぜかという、有島武郎の親友の1人に橋浦泰雄さんという方がおり柳田国男の門下生で、柳田国男の門下に入る前に有島武郎から親友と呼ばれた方です。橋浦が呼ぶんだったら行ってやるよと来られて、橋浦さんは有島の様子がおか

しい、おかしいとずっと書かれています。結局帰って別れた後いなくなり、必死で捜し回ったけれども軽井沢にて死体で見つかります。その部分で言うと、有島武郎を追悼して与謝野晶子が歌を読んでいるというのも、その続きに出てきます。これも鳥取へ来た時の新聞記事を見ると、単独の記事では分からないですが、横にも一つ囲み記事があって、先ほど、新秋名果という詩の話がありました。その詩を書いた尾崎翠という作家が講演会を行う同じ日に来ているんですね。ロゴス文化会館というところのレストランで講演会を行い、午前中に与謝野晶子が講演して、午後尾崎翠が講演するという、そんな日でした。

実は私はもともと博物館での業務は文化史で歴史や地理が専門ではないのですが、鳥取に来て最初に行った仕事は、尾崎翠さんという作家や近現代の文化者や、文化人を調べるというものでした。ただ博物館で行うなかではそうは言っても、文学者の人はほとんど東京に出て活躍するようになります。明治から大正、昭和の初期は鳥取県が一番文学者を排出している時期ですがこの時期は、やはり近代文学では都市文学がほとんどで、都市と田舎の行ったり来たりの中なかで書かれてくることあるため、どうしても東京の話ばかりになり地域の話にならない。では、その人たちを生んだ場所はどんな場所なのか関心をもちながらやっと思い込んでいたというのがありました。そのなかで鳥取市はとくに城下町のエリアがとてもおもしろい場所でしたので、今日お話しされたお三方の話を繋ぐ場所としてこの場所が一応の共通項でもあり、その点を中心にお話しさせていただきます。



『城下町とっとり まちづくりの歩み』(2004年)鳥取市歴史博物館所蔵資料)より転載

こちらは鳥取市の航空写真であります。この町は実は湿地帯を埋め立ててつくった人工都市でここに鳥取城という山があります。本当はこの辺一帯が氾濫原で湿原になっていたところですが、江戸時代の初めぐらいにこの袋川という川が掘られて、この範囲ぐらいが干拓され町ができています。そのため柴崎さんがお話しされたように碁盤の目状の町屋の割があり城の周りは武家屋敷になっていますので、片原通りというこの周辺の通りを境目にして武家屋敷と町人町と区画がきれいに分かれています。この町は江戸時代の初めぐらいに地盤ができますが、実はほとんどそのまま今も使われており、これは大正の終わりぐらいにつくられたものですが、よくある鳥瞰図です。



佐々木孝文氏の報告資料より転載

この手の図面はどこの地方都市でも観光用につくりますが、鳥取城の山があり、こちらのほうに鳥取砂丘があり、この地図は本当は横にとっても長く、さらに行くといく鳥取大学や湖山池も本当は入っていますが画面におさまらないためここで切っています。先ほど言いましたように袋川があり、その内側のもう一つ薬研堀という内堀で区画されていて、お城があり武家屋敷がある町人町があるという構造になっています。今日話のあった福田さんのおられる鹿野街道はこの道です。この道は鹿野町という堀端のところからずっと外に向かって出ていっており、今の鹿野町に通じているため鹿野街道と言います。一方、鳥取駅が今もここにあります。鳥取駅から県庁に向かって真っすぐ上がる道があります。これが今の若桜街道という町になっており、これは明治以降、鳥取駅ができてからは庁と駅をつなぐ道になり、これが今、目抜き通りになっています。その真ん中に智頭街道という道が

あり、これは今日最初に質問された方がおられる智頭へつながっていく道です。智頭まで随分とありますが、そのうちの城下町の部分が智頭街道と呼ばれ目抜き通りのほう、真っ直ぐになっているところ。今もほとんど同じような町の構造になっており城の脇に県庁があり鳥取駅と袋川と県庁の関係はほとんど変わらない形で今もあります。

柴崎さんから話があったように上物というのは、日本の町だと何か仮設的にどンドンと変わっていきますが、鳥取は伝統歴史都市ではありますが昭和18年の鳥取大震災と昭和27年の鳥取市大火災があり、上物の8割程度がその時になくなり、今残っている建物はほとんどありません。江戸時代の建物は山の手という比較的山沿いに近い、お寺には残っていますが町場にはほとんどない、町屋の建物が1軒だけ城下町交流館高砂屋に少し遺構がありますが、建屋としてはほとんど見られない状態になっています。武家屋敷も同じように、地震ではそれ程壊れなかったのが、その後立て替えが進んだためほとんど見られない状態になりました。それは現在の仕事の話ですが、鳥取城の部分から景観復元しようとして、今、お城の門などの復元を鳥取市が進めています。街路組みは変わらないが上物がないというのが、一つの特徴の町です。

これが智頭街道を描いたものです。この道はなぜ大切かと言うと、鳥取城を出て擬宝珠橋という橋を渡り参勤交代で殿様がここを通る道になります。ちょうど鳥取駅のあるあたりが棒鼻という場所になっており、参勤交代の行列は町の中はとでもきっちり組み立てますが、ここで一旦バラして長い距離を歩けるようにして、次の宿場駅でもう1回組み立て直しますが、そのバラした場所がここになります。先ほど写真で見て頂いたときに、佐藤さんの写真や福田さんの絵にも少し出てきましたが、これが城山になっており鳥取の城下町はどの街道を通っても真後ろにこれが生えてくるという形になっています。



写真撮影：佐々木孝文氏

町は今、これはアーケードがついている火災後の復興された町並みですが、この建物が差し変わっていくと、さき程の佐藤さんの古写真にあったような景観になっていきます。実は400年間位の道の景観は大きくは変わっていません。ただ何となく歩くと全く分かりません。これはそのような情報が集まってきて見ようとすると見えてくるというものではあるため、イメージの中では違いますが鳥取の分かりやすいところは久松山に対する目線だけはほとんど変わらないところです。どの世代でもこれを目安に聞いているとほとんど話が通じるようなことがあります。



鳥取県立公文書館所蔵資料より転載

これが昭和18年の鳥取大震災です。これも、私が博物館に来て調査を始めた頃は、実際被災した方が元気でおられたので直接話を聞くことができましたが鳥取大学におられた西田先生という地学の先生が聞き取り調査をされましたが、もうさすがに実体験した方というのはほぼおられない。この時の話も、震災の被害報告書として海軍がつくったものが様々にあり、実際どんな目に遭ったのかということは少し薄らいできており、20年前に聞いた時秋祭りの練習をやっていた時で、町会所のようなところに子どもが集まっていて、その集まっている時に地震が起こって下敷きになり自分の子どもが亡くなってしまったという話が聞かれた。統計的には何名死亡した点しか公表されないが、亡くなった人たちに対してどう思っていた等は徐々に薄らいできています。

ここ（直前写真の右奥部分）に写っているビルは五臓圓ビルです。これは今登録有形文化財になっていて、智頭街道で街づくり株式会社いちろくが管理しており2階にエスニック料理店などが入

っていますし1階は五臓圓薬局です。そのためこの写真を見て智頭街道に行って五臓圓ビルを見ると、どんな情景だったかというのが少し見えてくるのではないかと思います。

これで普通のところだと昭和18年にこの状態で空襲はほとんど受けていません。この状態を爆撃するのはさすがにないでしょうが、ただし、ここから戦時中で復興事業があまりできずバラック建ての安普請の復興住宅が多く建ち、あるいは戦争が終わり引き揚げてきた人が住むとこがないためバラックの家を堀端に袋川の縁に多く建てています。

その状態でフェーン現象が起き鳥取駅周辺から火事が起こりました。爆撃は無かったが、爆撃されたのとはほぼ変わらない状態になっています。これは昭和27年の鳥取市大火災の時です。このことで先ほどの五臓圓ビルはコンクリートのビルだったため残りました。目に見える上物は短期間で更新されています。



鳥取県立公文書館所蔵資料より転載

この後、若桜街道は日本で最初の防火建築帯という指定を受けコンクリート3階建ての建物で全部建てるために復興事業を行います。残念ながら補助金の額が低く自力で3階建てが建てられなかったため最初2階建てとして建て、後に3階建てにする条件で短期間で建て替えるためちゃんとした鉄筋コンクリートで建てられなくなり、コンクリートブロックを積んだような建物が多くあります。

そのため今は老朽化しかなり住めない状態になっています。そのため若桜街道も、これから後は、柴崎さんの話のように、あつという間に見られなくなるものもあるのではないかと思います。

ただ鳥取の場合、明治維新の後に上級の武士層がほとんど流出してしまうことがあったがこれは鳥根県と併合されていたことで役人であった高級

家臣層がいなくなったためでした。町人はそのまま残る人が多くあり鹿野街道、智頭街道、若桜街道は江戸時代から町並みごとに業種が分かれ町の雰囲気は違うが、それは今でも残っています。町としての伝統は継承されているところがあり特に鹿野街道は福田さんの話もありましたが店はほとんどもう残っていないです。もともとは生鮮食料品を扱っている店があり、日常のものは鹿野街道の市場で売られ、智頭街道では高級呉服など売られており、若桜街道は蓄音機店やカメラ店など割と新しい業種が多い明治・大正時代時代の特徴です。

このうちの鹿野街道筋は今ほとんど店舗がなくなりましたが福田さんの話から、町場の商家の雰囲気というのが気持ちの中によく残っており、鹿野街道の雰囲気がよく分かります。ちなみにこれは火災復興事業を行った場所の図面で、この時被災が甚大だったところを町名も変更していますが、碁盤の目上の道組をほとんどいじっていないため名前こそ変わりましたが袋川の内側に関しほとんど町の組が残っています。ただし物としてほとんど残っていません。そのため見ようとすると見えるけれども、何にも見ようとしなければ見えない状態です。福田さんが話されていた聖神社という神社が、まちなかでは一番大きな氏子域を抱えている神社で、その聖神社のお祭りを出していた山車を復興するというのは、それを生き返らせてくることになるのだらうと思います。ちなみに本当は鹿野街道で1つではなく町ごとに持っていました。今は鹿野街道で1つ持たれています。

また補足的にまちなかの話として鳥取の町というのは、江戸時代の初めぐらいにつくられた町の構造というのが多く残っており袋川で区画され、中の碁盤の目上のところに、町衆と町人や職人が集中して住み、この薬研堀と言っている堀の内側の部分にお城を中心に重臣たちから順番に並べられています。袋川の縁のところはずっと武家屋敷になっており袋川を守るようにできていて、どちらかと言うと町人町が武家屋敷にぐるりと囲まれているような構造になっています。3万人の人口と言われているのは、おおむね戸籍として分かっている人口で、武家屋敷の中の奉公人の数は分からないため結構幅があります。物によっては8万人ぐらい住んでいたと仰に書いてあるものもありますが、大体3から5万人ぐらいは住んでいたようです。今この範囲に1万人程度しか住んでいないため相当人口密度は高かったのではないかと思います。

記録を様々見るとこの武家屋敷には奉公人がい

ますが、面白いことにこちらの町から奉公人に行く人はあんまりいません。ではどこから来ているかというところ兵庫県の但馬から来ているようです。但馬の浜坂からこの女中さんに入っており、その女中からしつけを受けて、また村に帰りお嫁に行くような記録が残っています。

こっこの町人町はどうなっているかというところ、江戸時代の初めぐらいにつくられた町のため、それまではこのあたり江ヶ崎に少し人がいた位で、大きな町ではありませんでした。そこに鳥取藩主池田家という大きな大名が来たためこの規模の町が必要になり、住んでいる住民もほとんど因幡の人ではなかったはずで、最初は岐阜出身の人と兵庫出身の人がほとんどだったはずで、そのため古い町家の屋号は高砂屋、播磨の町名がついています。これが記録で江戸時代の終わりにになると、そういう家が破産し、破産した人は町人株という町の市民権をもっていますが、その市民権を売っています。それを買って町人になるという現象が起きて秋里屋さんや、その周辺の地名がついている屋号のところはそんな歩みで大きくなっている家があります。では、入れかわったのかかというところそんなこともなく、一度衰退した初期からいる人たちがまた復活し、あるいはもともとは地元で武士だった人が一旦町人になる家もあり、そんな家が混在しています。

昭和60年代までの本を読むと、雑煮の種類が色々あると書いてあり鳥取で有名なのは小豆雑煮と書いて今ぜんざいになっていますが、海岸沿いは出雲地域から小豆で雑煮をつくるんですが、城下はすましや白みそなど色々な人がいたようです。これは鳥取に限らず他の研究でも江戸だと初期のころの商人町は関西弁の人が多と言われていいます。商人は関西から来ているため三井などもそうですね。そう思うとだんだんと都市自体が使っている間にどんどん姿が変わっていきます。ちなみに鳥取のこの町割を考えた人は日置豊前という家老だと言われており、それを実際に設計したのは辻さんという浪人だと言われています。その辻さんという家は大工町に家があり東照宮の飾り物をつくっていたと記録にはあります。残念ながらもう今はおられないので分かりませんが、その辻さんが設計のために連れて来られた。ところがその人は正式採用してもらえず岡山と鳥取とで図面を引きますが藩士にはなれず、そのまま解き放されて町人になっています。ただしよそに行くのは許されなかった訳です。お城を中心とした防御施設が

たくさんあるため、戦闘の際の秘密を知っているため出してもらえず、そのまま町人になり最後までいたようです。

今日柴崎さんのお話を聞き、自分も都市計画から入っているため最初はどのような考え方でつくろうとしたのかに興味があり調べてきましたが、実際に見るとつくろうとしたものとできたものは違ってくるんです。できてきたものはやはりその場で色んなことをやっている人たちが動いてでき上がっていくことになるんだと思います。

鳥取東照宮がありますが、鳥取東照宮禊瀧神社の門前のところに進駐軍が使っていた禊瀧グラウンドアパートという洋風建築が残っており、市の指定文化財にもなっていますがそれとは別に保存会をつくりコンサート活動などを行っていて、前回のコンサートでやった後図書館に来て頂いたということがあったり、湯梨浜町からは汽水空港さんに出品してもらったりなど、どのように今までであった古い建築物を残していけばいいのから始まっています。

やはり都市も建物も何らかの形で使っていかなないと残せないと思い、どういう形だと残せるかを考えています。そこにいる人たちがとりまわせるというか、動き回せるような形に町というのは変わっていくのではと思います。本日の皆さんの話を聞き、そんな感想をもちました。

有島武郎の研究は今再度盛んで、有島武郎研究という研究会がありますが、荒木優太さんという若い研究者が「在野研究ビギナーズ」という本をこの間出版しました。私と同じように仕事ではないがこのような地元の事に関心を向け少し時間を裂いてちゃんと調べてみようとする人は徐々に増えています。そういう人たちの成果も含め、また図書館や色々な活動に生かしてもらえると面白いと感想として思いました。



佐々木 孝文氏

全体討論・質疑応答

稲津：最後の総合討論に移りたいと思います。まず、山根学部長の開会挨拶に、人びとの公共性を再構築するという課題が地域学にはある、という問題提起がありました。私ども地域学部の出版物には『地域学入門』というテキストがあるのですが、そこでも「つながりを取り戻す」というテーマが掲げられています。公共性を再構築し、「つながり」を取り戻すことには、どういった内実が伴うのか。それはどういった条件によって可能となるのか、といった問いをめぐって議論を重ねて参りました。この問いを大学の中だけで考えず、まさに、鳥取なら鳥取という地域から問いかけられていることがあるように思います。地域に関する知のあり方が、まさに「地域の側」からもつくり出されている。このことを改めて実感しているところです。それでは、村田さんから一言お願いします。

村田：私が4人のお話を聞きながら少し思っていたことがあります。その一つが、誰が何のために記憶を記録するのかということでした。こういうことは、図書館のような公的空間がこれまで主に担ってきた役割や機能だと思います。けれども、それがだんだんと私的なものへと移行してきている。さらには、それを他者と簡単に共有できるようになっている。モビリティといいますが、スマホも含めてたくさんの道具や技術がそれを可能にしている。さらには、記憶の記録をめぐる知識についても同じ状況にあると思うのです。そうした私的な営みがゆっくりとつながり共有されるなかで、記憶とか記録が生み出されていくということが現代社会なのだということを、4名のお話を聞きながら改めて実感したところです。

ここからは今までのお話を聞いた上で、もう一度、蛇谷さんと福田さんにお話を戻していきたいと思います。では、蛇谷さん、他の方々のお話を聞いたうえで、少し自分のことを振り返るというか、お話をいただければと思うんですが。

蛇谷：私は、ここ鳥取に来たときは、一人というか二人ぼっちで来て、今はたくさんの仲間というかつながりができて今に至るんですが、単純に電話帳の数がめっちゃ増えたみたい、そういう感じなんです。鳥取での知り合いだけではなく、鳥取以外の方たちとのかかわりが大阪にいたときよりもすごく広がった。かつ、別にアートを知っている知らないかは関係なく、老若男女いろんな人たちとかかわった中で、自分がどのように何を共有したいのかなということを、改めて、佐藤

さんのお話とか聞いていて思っていました。何を共有したくて、これから、何を伝えていくのか、それは自分が組織の代表だからという立場もありますし、自分が個人としても、ただ会社とかチームのことだけを考えるのではなくて、自分が個人として次にどのような段階に行くのか考えたときに、何をやるのかなというのを考え始めたところですかね。福田さんは、本をすぐ書けるぐらいの蓄積が既にある。それでいて、いまでも実践者でもあったりするのでおもしろいなと思っていました。じゃあ自分は、やり始めて10年ぐらいの蓄積が、少しづつ見えかけている今、何か次のステージだなという感じは得ているんです。では、次は何をしようかなというワクワクと、これまで出会った人たちに私は何を伝えなきゃいけないのだろうということを考えました。

村田：ありがとうございます。伝える。後世に何を伝えたいのか、そして、そのためには伝える相手が必要だということですが、その点で、福田さん、何かお話があればお願いします。

福田：先ほどは失礼しました。どうも、こういうアカデミックな格調の高いところは生まれて初めてでして、制限内で40年間を語ろうと急いだので、大体60点ぐらいだと自己評価しております。(笑声) いや、本当に、冷静になりましたので、短い時間で、言い足りなかったことをこれからしゃべらせていただきます。2点ほどです。

先ほどお話をさせていただいたように、私はちょっとした著作・冊子をこの4年間で5冊ほど書き上げました。私は営業の人間でして、人と話をすることが仕事ですので、それはずっと訓練してきたんです。けれども、本を書くということは、手紙ぐらいしか書いたことのない男でした。けれども、自分が40年間やってきたことや、これは自分の子孫に伝え残さないといけないことがあると、そういう自覚を持ちだしました。それで、その類友の法則と言いますけれども、ここにも来てくれている私の友人達と非常に共鳴しまして、発破をかけられて、当初は原稿用紙20枚ぐらいのところ納めようと思ったのが、その第1巻目が100枚になっちゃいました。それが『鹿野街道物語』という冊子で、本当に中身は幼稚な文章ですけども、思いは本物です。私がやったことは全て書きました。その文章のおかげで、このシンポジウムに呼んでいただくことにもなりました。このシンポジウムでは全部しゃべり切れないので、皆さんに冊子を渡したほうがいいのではないかと

と友人らのアドバイスがあったので、会場の皆さんのお手元にお配りしたということです。

さて、先ほど蛇谷さんがおっしゃられていたことですが、私はやはり自分自身と世間がつながるということが大切だと思います。本を通じたつながりも大事です。けれども、やはり実証を通じたつながり、みずから世間につながっていくことですね。私の場合であれば企業活動もそうですが、40年間にわたっての38の社会活動ですね。自己評価すると、ようやったなというのが正直な気持ちです。さっきは、類友の法則と申しましたけれども、やはり原点は自分自身です。人がしてくれるのを待つ、行政がしてくれるのを待つ期待するということでは、世のためにはなりません。やると言ったら、蛇谷さんみたいに、みずから動き、それに仲間が共鳴してその輪が広がっていく。いまでは、数十人のグループができておられるそうですね。若くしてこれだけのことを成し遂げるといのは、この人の生きざまや信念から出てきたエネルギーがそうさせていると私は思います。その点、私は40歳からのスタートでした。それまでの私の人生は、借金返済と人生の基礎づくりに明け暮れる日々でした。それが土台になって40歳からの40年間も「勇者一人立つとき最も強し」の気持ちでやってまいりました。ちょっとキザですけども、ローマの哲人のキケロのこの言葉が好きでして。この言葉は、2,000年前も現代も同じだと思います。やはり、たった一人でも本気になって立ち上がると、類友の法則で、共鳴者が生まれます。3人でも300人を動かすことができるという、25歳の私に知人が送ってくれた言葉が今も生きております。

類友の法則と言いますと、同じ志を持った友人が、ここに参加しておられますので、少しお時間をいただいでご紹介させていただきます。まず、そこにおられる、亀屋至郎さんという方は、生粋の鳥取育ちの元銀行マンです。この方は、25年間にわたって久松山を考える会として活躍しておられます。このたびの大宮池の藻の回収のときにも、6人の仲間と仕事をしてくれた熱血漢のお方です。それから、もう一人は、きょうはお見えになっておられるかわからないけれども、常村護さんという方です。この方は、昭和初期に智頭街道に建てられた鉄筋コンクリートの大型建築を1億円で再建された方です。鳥取大震災、鳥取大火で解体寸前になったその建物を残すために、市の活性化協議会と提携して、みずからもお金も出し

て、街づくり株式会社を設立して鳥取の街に貢献しておられる方です。もう一人は我が鹿野街道筋の先にある鹿野町の長尾裕昭さんという方です。その方は、30 年前からまちづくり活動されておられる全国でも有名な方です。鹿野という町は、4,000 人の人口しかありませんが、やっていることはすごい。8つの施設を持って、10を超える事業をやり遂げてこられた。このたびも、地元からの資本金 3,800 万で、最近でき上がった鳥取の高速道路の青谷のあたりに道の駅を立ち上げておられる。それから、彼は山紫苑という鹿野温泉の国民宿舎も復活させておられます。アンケートを実施したところ、町民の 97%がこの町に住みたいというほどのすごい町を民間の力でつくっているんですね。そういった方々とおつき合ひも、私の社会活動の大きな刺激とエネルギーになっているんです。これ以上しゃべると、とんでもないことに話が行きますので、このあたりで締めます。



総合討論の様子

村田：ありがとうございます。では、会場から質疑応答を受けながら、もう少しお話を掘り下げていきたいというふうに思います。何か御質問等々があれば挙手をお願いします。

会場発言：福田さんに質問があります。この本〔注：会場にて配布された冊子〕の 29 ページに、左側に「地域再生は現在御師」、御師の力であるところがあるんですけども、ちょっとこれについて初めて聞いたので、説明をお願いします。

福田：私は事業を行うたびに、日本海新聞に投稿してきました。その投稿の中で地域再生は御師の力であるということを書いたんですね。歴史を知ると、その時代時代にその地域をつくったとか、町をつくったとかいろいろ事例が出てくるんですね。

御師というのは、神社を持つ地域、いわゆる門前町ですね。結局のところ、それぞれの先祖伝来の神様を大事にして、その神社のお札を配る、それから行事に参加する、そしてお世話する。さらには、参詣される人々の宿もお世話する。そうやって町を挙げて、その神社を中心としたまちづくりが、中世のころから盛んにやってこられたわけですね。それを現代に置き換えると、さきほど私が言いました鎮守の森につながるんですね。鎮守の森を中心に、現代の人々が御師になってつながっていくことで、街を盛り上げ、街を変え、街を活性化させていく。別に、そんなおとぎ話は言っているわけではありません。その成功事例が、島根県の出雲の国のオオクニヌシノミコトを祭神にしている神社ですね。一時は 200 万人に参詣人に落ち込んでしまっただけで、これでは飯を食っていけないということで、民間が行政を動かし、コラボレーションする形で立ち上がった。いまでは参拝客が 300 万人になって、街は安定した発展を遂げております。それから米子と伯耆町と大山町と日野町の一市三郡のプロジェクトです。大山開山 1300 年を記念した一大キャンペーンを数年前から始めておられます。あの辺は、霊峰大山信仰を背景にした土地で、牛馬市が 800 年間も続いたところですから、やっぱり民間の力による地域の活性化や発展がみられる。境港も、そのグループに入っていますね。あそこも、非常におもしろいまちおこしやっておられるのではないですか。そういうことで、御師というのは御理解できたでしょうか。

村田：ありがとうございます。ほかに質問はありますでしょうか。では、お願いします。

会場発言：地域学部地域創造コースの 1 回生です。本日は、さまざまな視点から、地域について考える機会をいただきすごく感謝をしています。ありがとうございました。

蛇谷さんにお聞きしたいことがあります。私は今ゲストハウスの運営というのにすごく興味があります。その中で、住民が運営にかかわる機会の多いゲストハウスが増えるといいなあと考えています。ゲストハウスの運営に当たって、例えば朝食を住民の方とつくったり、献立プランを一緒に考えたり、あとは、その地域の伝統工芸品なんかを利用して住民の方々と一緒にイベントを行ったりとか。そんな感じで住民と一緒に協力しながらゲストハウスを運営できたらいいなあと考えています。住民とのつながりが増えたと講演のなかで言われていたのでお聞きしたことが

あります。一つはビジネスプランの中に住民の人が入る込む可能性についてです。もう一つは、私の地元でも空き家がすごく問題になっていて、空き家を利用してリノベーションをしつつ、ゲストハウスを運営できないかというふうに少し考えているのです。それを実施するとなったときに、今の自分は学生なので、やっぱりお金の問題とかがすごく心配になっています。なので、学生という立場からどういうふうにスタート地点に立ったらいいかというのを教えていただきたいです。

蛇谷：めっちゃ具体的でしたね。(笑声) ありがとうございます。こちらから質問してもいいですか。住民というのは誰ですか。

会場発言：今の話で想像していたのは、そのゲストハウス周辺の地域の方々ですね。

蛇谷：地域の方々。

会場発言：はい、地域の方々です。

蛇谷：地域の方々って誰ですか。

会場発言：地域の方々って誰ですか？誰ですか....

蛇谷：隣の人。

会場発言：隣の人....

会場発言：私が具体的に想像したのは....地元の特産品を使った朝食を提供するのであれば、昔からそこに住んでいて、地域のことをよく知っている高齢者の方というイメージが自分の中ではあります。

蛇谷：なるほど。私、住民という言い方をしたかなあ。ちょっと、自分で言った言葉を忘れちゃったんですが、本当にいろんな町外の人もあるし、町内の人もある。でも、町内といっても全員ではなくて、たみに興味のある人が来るみたいな感じなんです。だから、あのおばちゃんは来てくれるけれども、あのおばちゃんは来ないのかも全然あるし、みんながたみのことを理解していたり、来ているかと言うとそうではなかったりする状況です。だから、地域の方々っておおまかに捉えるよりも、ビジネス用語で言ったら、ターゲットを具体的にするみたいなことだと思うんです。郷土料理が作れる、体力がある、時間があるおばちゃんみたいになったら、それは誰？みたいな。その町にどんな人がいるのカーサーチが必要かなと思います。実際にいたら実現すると思いますよ。いなかったら難しいですよ。私らははじめに頭から考えないというか、出会ってから考えることが多くて。なぜなら、鳥取に来ると、人数が少ない分、頭でこんな人がいたらいいなと思っても、そ

んなに都合よく出会うことはなくて、机上の空論みたいになるんです。だから、出会って、意気投合して、この人と何かしたいなと思ったときにプログラムが生まれたりする。その人がお金がほしかったら、お金を生むことを考えなきゃいけないし、ボランティアで何かおもしろいことがやりたいなということだったら、そういうことを考えたりします。そうやって何を受けてどう返すかみたいな感じなんです。あ、あんまり枠をつくらないというか、自分ができる返事はそれですかね。

それと、あと、学生のうちに、自分の地域でなるべく時間かけて過ごすほうがいいのかなど思っています。いろんな方がゲストハウスをやりたいと言って、たみに来てくれたり、Yに来たりするんです。でも結局、自分の地域との違いがあり過ぎて、こうやったら成功するんだという何かいい例ばかり見て、帰っていくんです。そうではなくて、やっぱり自分の町の文化とか、目に見えないものとかをどれだけ吸収できるか、お祭りに参加するとか、おもしろい人を探し始めるとか。何か質問して回るとか。学生だから教えてもらえることはいっぱいあるなと思います。ビジネスを始めようとなった途端に、みんな身構えて、大体教えてくれなくなるのでね。今のうちに自分の町のことを知ったり、あと逆に全然違う外国に行ったり、もっと自分の世界観を広げて吸収できる状態にするのがいいのか。あんまり成功例やいろんな事例を見過ぎると、何かまねっこしたり、囚われちゃうから。そうではなくて、自分の町に合った、自分の町でしかできないことをやるのは、あんまりたくさんの情報を入れる必要はないのかなと私は思いました。あとは、社会経験はいっぱいあったほうが良いと思います。名刺の交換とか基本的なやつ。

会場発言：ありがとうございました。

村田：ありがとうございました。具体的な質問により具体的に教えてくださいました。ほかにはございませんか。はい、では。

会場発言：地域学部の3年生です。福田さんに質問です。先ほどの講演の中で、文化が人の心が溶け合う溶鉱炉という表現されておられました。そもそも問題なんです。その文化を人の心に根づかせるというか、文化という背景を人の心に広げるにはどのようにすればいいのか、どういうきっかけが必要なんですか。

福田：私の生い立ちをしゃべりましたね。江戸時代から商業の集積地の鹿野街道というところは、も

う本当にすごいにぎわいの喧騒と商業の集積地だったんです。まちを代表する実力者には、やっぱり旦那衆が多くて、彼らが町を引っ張っているんですね。全盛時代には、全市を代表する大きな屋台が 2 台もあったんです。私が小学校 1 年のとき、戦後の敗戦国の日本を地方を、占領軍、進駐軍といいますけれども、その人たちが支配していたわけです。彼らも文化には理解を示してくれまして、敗戦後すぐに、250 年ぐらい続いていた聖大祭は復活したんです。その復活に、私たちは町を挙げて沸騰いたしました。44 町内全ての屋台、40 台ぐらい出たのではないのでしょうか。はっきりは分かりませんが、とにかく、何万人の人が参加したわけです。郡部からももうどえらい人がやって来たんですね。参加した小学校生の私は、お金で買えない感動を、そこでたたき込まれたわけです。それが、私の生涯のライフワークになりました。今はもう世代が変わりまして、うちの鹿野街道で 3 つの団体ができていまして、60 名というメンバーが育っておりまして、彼らが自主的な運営に入っています。ですが、今でも祭りの事になると、私はカッカと怒ってしまったり、若い人の運営に首を突っ込んだりしてしまいます。ですから、文化を人の心に根付かせるには、その文化を絶やさないと、何があっても続けていくことだと思います。

村田：では、これで最後の質問にしたいと思います。

会場発言：すみません、蛇谷さんのお話は、この間の「鳥取銀河鉄道祭」のときにも聞かせていただきました。蛇谷さんは大阪から来られて、今、鳥取でいろいろ活動されているんですけども、大阪と鳥取では当然ながら気質も雰囲気も違うと思うんです。ちょっと難しい質問かも知れませんが、大阪の雰囲気をどうやって鳥取で生かそうとされたのでしょうか。ちょっと質問の意図が複雑かも知れませんが、そういうことを何か考えておられたらちょっとお話を伺いたいです。

蛇谷：考えてないです。(笑声)

会場発言：それは、大阪は大阪、鳥取は鳥取で、また別の視点でという意味でしょうか。

蛇谷：ううん。大阪は大阪に行かないと大阪にないとか。鳥取も鳥取に来ないと鳥取にはないと思ってるので。でも、しゃべり方とか突っ込む文化とか、何か変わらない部分は持ってきているかもしれないですし、何かしら影響を受けるかもしれないですが、何かそれを普及みたいな感じは考えていないですね。

村田：ありがとうございます。では、そろそろ締め入りたいたいですけれども、佐藤さんと佐々木さんから一言ずつコメントをいただきたいと思います。最後に、柴崎さんにも一言いただけたらと思っています。

佐藤：先に私からでいいですか。学生さんからも質問があって、蛇谷さん、また福田さんがお答えになったことにもあるんですけども、例えば、今回、私が図書館でしているのは有名な文学者が外からの視点で鳥取というところを描いた、それを地元の人が読むと、ああ、感動するなというようなことがあるんですけども、作家は恐らく地元の人だけには向けていない。対象がさまざまだったはずなんです。先ほどの質問だと、その対象、例えばターゲット、それはマーケティングのターゲットなのでまた違いますが、やっぱり体感するようなターゲットとか、対象が誰かというのは、それこそ自分が把握できるものの範囲とかなのではないかなと思っています。いろんな経験がえられる方は、当然その把握できる範囲というのは地域的にも物理的にも広く幅は太いものになると思いますけれども、まず自分が身近に感じられるという、この今回のテーマ、狭いところであったり時間軸も非常に狭い、短いところであっても、自分がまず感じられることを丁寧に掘り下げていっていただいて、その積み重ねだろうと。それを共有していくと、自分が思ってもみない気づきだったり、また違う世界に、ふとしたときに飛び越えて、違うところにまた行ける、世界が広がっていくということになっていくと。例えば、私なんか、今回、まさに同じ登壇をさせていただいた福田さんのような地元の方と、この講演を通じて初めて接することができたんですね。地元の熱意を、鳥取って、意外とこういう熱量を官公庁では感じたことがなかった、図書館の中でなかったんですけども、ああ、まさに近いところにこういった熱を持った方がいる。それが、先ほど男性の学生さんも言われたように、文化を溶鉱炉に入れるようなというのは、まさに、そのいろんなところにあると思いますので、それは今後どう展開しているのか、課題を解決するだとか、文化を発信するだとか、いろんなところで見えてくればいいんだなと思っています。

佐々木：ちょっと違う話かもしれないんですが、私にちょっと年をとったお母さんがいて、あそこが痛いとかここが痛いとか、私にああしろこうしろと言うと、子供としてはすごく聞きにくいんです

よ。地域の事情って、結構、親が言う文句に近いなと思っていて、直接聞くと、すごく何とかしてあげたいんだけど、結構聞いているとだんだん頭にくるみたいなものであったりすると思うんですね。例えば蛇谷さんみたいに、よそのお父さん、お母さんの様子を見るような形で入ってきて、仲よくなっていくと、結構何か自分の親でもそうですよね、よその子のほうが仲よくなりますからね。それとか、1回外に出て帰ってくると、結構どこが痛かったんだなとわかるようになってたり距離ができたりするということがあると思うんですよ、ちょっと抽象的な話になっちゃいますけれども、何となく地域との距離感というのはそういうところがあって、例えば、最近用瀬のほうで、蛇谷さんが紹介された、きむらとしろうじんじんのアートイベントがあったりしたんですが、用瀬の人がやるよりは、最初はよそからというか、中心市街地から来た人とか、鳥大の学生さんが盛り上がっていたのが、やっている間に地元の人と一緒にできるようになってくるみたいなこともあるので、やっぱりそういうところがうまく回ってくるというのが一つのポイントなのかなというふうには思っています。

私も、もともとは兵庫県の神戸市の出身で平成8年に博物館をするときに来たんです。そのときは、最初に広瀬部長さんの話にあった若者、ばか者、よそ者枠であったのが、だんだん若くなくなってきたり、悪知恵がついてくるとばかでもなくなってくるけれども、よそ者だけは残るみたいな感じだったのが、最近、ようやく地元の人になれてきたのかなというふうになんか思ったりしているところです。

柴崎：本当に今日はいろんなお話を伺うことができて、とてもおもしろかったです。私は、今回初めて鳥取市に伺ったんですけれども、昨日と今日の本当に短い時間で、こんなにいろんなことを教えていただけてすごく貴重な時間でした。さっき佐々木さんのお話の中で、見ようとすれば見えてくるけれども、見ようとしなければなかなか見えないということをおっしゃられていましたが、本当にそのとおりです。いろんな方にお話を伺ったり、歴史的なことや地理的なことを伺うと、こんなおもしろい部分がある、それで、今の地域だったり文化だったりがかうなっていることがとてもよくわかりました。その中で、佐々木さんがおっしゃられたのとも重なりますけれども、外から来る人がいたり、外から見て、地元の

人が気づけなかったようなことを気づいたり、あるいは福田さんのようにずっと地元で生まれ育って、何でも知っていて、地元の方たちとのつながりもとても強い方がいらっしやったり、複数の視点だったり協力の仕方だったり、あるいは移動というものがあるからこそ、地域というのはつくられていくんだと思いました。私は大阪ですけども、丸福珈琲が鳥取の方が由来だったというのは、知りませんでした。丸福珈琲は、大阪の人はみんな、大阪の味、大阪の老舗と思っていますので、そうですね……（「あの文化も、一時代を築いた名店ですよ、コーヒー店は」と呼ぶ者あり）本当に今回それを知ることができただけでも、大きい経験です。大阪の丸福珈琲で成功されて、鳥取で文化をつくられたということも伺って、ほかの地域との交流とかかかわりがあってこそ生まれてくるものもあると感じました。

人数が多ければいいというものでもなくて、例えば大阪や東京などの大都市でも、地元のお祭りのおみこしを担ぐ人をバイトで雇って維持しているということもあれば、新しい住人も参加して形を変えながら伝統をつないでいっているところもあります。違った分野の人や違った視点を持った人が話すことで、発見やつながりができていくとことをとても感じました。ありがとうございました。



柴崎友香氏

IV. 閉会

閉会挨拶

藤井 正（鳥取大学副学長）

地域学部の藤井です。本日は本当に朝から一日、長時間に渡り誠にお疲れさまでした。また、基調講演をいただいた柴崎さん、それから、午後のシンポジウムの蛇谷さん、佐藤さん、福田さん、佐々木さん、いろんな角度から本当に興味深い話をいただきましてありがとうございます。

簡単にもう 1 回、まとめを私なりにさせていただきますと、最初の山根学部長の趣旨説明で出てきた「つながり」というのは、全体のキーワードとしてやはりあると思いました。柴崎さんの講演で特に興味深かったのは、柴崎小説の中の町の風景は背景ではないのだと、柴崎小説のテーマは、街と人の「つながり」なんだといったところが、ああ、なるほどなと思いました。一般の、他の小説とは違うということであらためて感じました。地域学部では、地域というのは空間のまとまりであるとともに、その社会的なまとまり、これが「つながり」になるわけですが、それらが一体になったものだと考えています。柴崎さんの小説に私が共感を持つのは、私が前の大学で教えたということもあるのですが、それ以外に何か感じるのは、その辺にあったのかなということであらためて考えました。

2 つ目の今日のキーワードとしては、「創造力」があげられます。最初の学部長の話では「根底としての創造力」という言葉が使われたかと思えますけれども、小説という表現、描いていくという意味での「創造力」というものが、必要だということですね。それは「イメージ」ということになるかと思えます。地域について考えるときにも、現実、今ある地域や空間的なものをフィジカルに取り上げるだけではなく、それに対してどういうイメージを持つかということも重要なポイントになります。地図帳の地図ではなく、メンタルマップとかイメージマップという、手書きの地図みたいな世界に何が表現されるのかという、そういう研究も行われています。地域づくりをしていく上では地域の将来像、つまりビジョンを共有していくためには、やはり地域のイメージづくりというものは必要なものであると考えられます。

もうひとつは、これも最初の趣旨説明で出てきましたが、「歴史の積み重ね」です。「歴史の積み重ね」というのは未来につながっているんだよという話になりましたが、これに関しては地域計画の

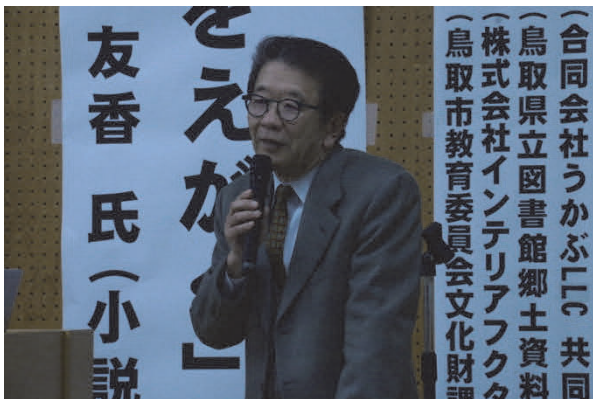
言葉ですけれども、「懐かしい未来」という言葉がございまして。「懐かしい」というのは昔のことを語る言葉で、「未来」とは普通くっつかないんですけども、これからの地域の未来というのは過去と断絶したものではなく、「懐かしい未来」をつくる。そういう過去とつながったものになっていくことが大事であるという、そういう主張の言葉であります。この点についても、基調講演で柴崎さんは街の過去とのつながりについて、『わたしがいなかった街で』という小説のテーマはそこにあったということをお教えいただきました。今の私を支えているのも過去なんだということ。これも我々地域学部で考えてきたことと共通するものです。しかも、この小説は東京が素材ですよ。だから、その東京は、普遍的・画一的な「グローバル東京」ではなくて、ローカルな東京なんだという。東京にもローカルがあるんだよという話を含めて、別に東京だからグローバル、一極集中している東京だけではないということも、地域というのは東京にもあるんだということをお確認できたところかと思えます。

こういった意味で、過去とのつながりということをお話を特に後のシンポジウムで鳥取の例で語っていただいたのは福田さんということになるわけですね。一番私が響いたというか、風景の違いにピンときたのは、「鹿野街道は、においが違う」と、あの言葉が一言で何か浮かんでくるような、そういう気がいたしました。そういう言葉が実感を持って語れる方、その人に話を聞くということ自体が大事なことなのかなと思えますし、一方で、それはアーカイブとしてやっぱり残していくこと、風景とか文学にどう表現されたかも含めて残していくことの意味については、佐藤さんが整理してくださいました。そのような方面での仕事もまた大事ですし、そこから、また何を酌み取れるか、東京の世田ヶ谷とか公営住宅の話は基調講演で柴崎さんが写真とかを使ってしてくださいましたけれども、その鳥取バージョンを、佐々木さんが資料の大正時代鳥取の鳥瞰図を使って、うまく町の歴史の積み重ねをちょうど見せてくださったと思えます。

蛇谷さんは、そういう町にやって来られて、新しい「つながり」を、会社というメディアでという言い方をされましたが、つくってきた。そうした活動をずっと重ねてこられた方ということになります。柴崎小説風というと、「私がやってきた街で」みたいな形になるのかなと感じておりました。このように今日のお話は、全体としてこういったキーワードでつながるものになるのかなと考えました。

私が鳥取大学に来たのは、地域学部ができた時
で、もう15年ほどになります。地域学部っておもしろ
そうな学部だなと思いましたので、前の大学から
移ってきたわけですが、同じころに柴崎さんは
東京に引っ越しているということをお聞きま
した。そして、東京に行って最初に出したのが『そ
の街の今は』で、大阪を舞台とした小説、それから
『わたしがいなかった街で』(芥川賞はこっちのほ
うで欲しかったが対象には長過ぎたという裏話も
語ってくれました)という東京の小説となる。だか
ら、それら作品の中で、まさに小説で「つながり」と
いうものを描いていて、さらに自分の小説がこう
いった街・人の「つながり」の結節点になればと
いうことも言われていました。柴崎小説が街と人
のつながりを思い起こしていく、新たにつくって
いく結節点になっていくこと、小説を書いて終わ
りではなくて、また何か社会に動きを起こす意味
でおもしろいんだということかと思いました。

地域学部で我々がやってきたことも、いわば「つ
ながり」を探究してきたわけで、地域学部がその結
節点になる、つまり、地域の方の、あるいはそういう
ことに関心を持った学生の皆さんとの結節点にな
っていくことを考えて、いろいろと我々は活動し
てきたかと思えます。そういう意味では、柴崎さん
と表現の方法は違うわけですが、何か時代の
方向性というのは、やはり共通するものがあつ
たのかなとあらためて感じたところです。いろい
ろ材料を提供いたしましたので、柴崎さんにはぜ
ひ鳥取をモチーフに一作お願いができればと思
います。アーカイブもちゃんと鳥取県立図書館に用
意して下さっているようです。取材の相手の方も、い
ろいろ御紹介をさせていただける状況になりました
ので、お願いができればと思えます。ということで、最
後の御挨拶にさせていただきたいと思えます。本
当に皆さんどうもありがとうございました。



藤井正氏

地域学研究会第 10 回大会研究成果報告（ポスター掲示）

2019 年 11 月 24 日（日）鳥取大学地域学部 5 階 掲示時間：9:30～16:35

〈地域学部附属子どもの発達・学習研究センターの研究活動〉

1	新生児・乳児における発達基盤としての睡眠－覚醒（行動）リズムの非侵襲的評価手法の開発 儀間裕貴（子どもの発達・学習研究センター）
---	---

〈地域連携研究員の活動〉

2	若者受け入れ農村のための関係づくりハンドブックの作成プロセス 小林悠歩（地域連携研究員）・筒井一伸（地域創造コース）
3	農山村における対話のプロセスデザインに関する社会的実践 中川玄洋（地域連携研究員）・筒井一伸（地域創造コース）
4	T 式ひらがな音読支援の 6 年間のまとめ－第 1 回音読確認の音読文字数の比較－ 赤尾依子（地域連携研究員）・小林勝年（子どもの発達・学習研究センター）

〈平成 30 年度鳥取県環境学術研究等振興事業〉

5	中鳥取県部地震によって被災した石造文化財の保存対策調査 高田健一・中原計・李素妍（国際地域文化コース）
---	--

〈教員・大学生の研究活動〉

6	高大連携による地域系高校の実践型教育を通じた人材育成：地域づくりとゲーミフィケーション 白石秀壽（地域創造コース）
7	買い物カゴの中身は何か？ジビエのアソシエーション分析」地域学部地域創造コース 椿真衣（地域創造コース・3 年）・白石秀壽（地域創造コース）
8	2019 年度地域フィールド演習－豊岡市－報告（概要） 地域学総説フィールド演習チーム：吾郷実季子・井端実優・岡本羽矢可・小川颯真・上山希望・酒井美咲・中井美優・成田真由・森田恒志郎・石井菜々子・奥田智・牧園愛夏・真島佐和・升崎侑奈 指導教員：竹内潔・大元鈴子・石山雄貴（地域フィールド演習担当）
9	コウノトリを活かした地域づくり（自然との共生） 地域フィールド演習チーム
10	豊岡市の個性を活かした地域づくり（芸術文化を中心に） 地域フィールド演習チーム
11	地域学総説 C： 地域学部附属芸術文化センター2019 年度文化庁大学における文化芸術推進事業 地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業 木野彩子・五島朋子・佐々木友輔・竹内潔・筒井宏樹・西岡千秋・蔵多優美
12	児童の並行的な造形活動における他者観察の影響状況－視線分析を通じた同年齢ペアと異年齢ペアの比較－ 武田信吾（人間形成コース）
13	東アジアプロジェクト 柳静我（地域文化コース）・小村幸基・垣屋知里（地域文化学科・4 年）
14	出版物紹介：子どもの権利最前線 カナダ・オンタリオ州の挑戦 子どもの声を聴く コミュニティハブとアドボカシー事務所 畑千鶴乃（人間形成コース）・大谷由紀子（摂南大学）・菊池幸工（菊池コンサルティング）

地域学研究会第10回大会 地域課題と知のクロス

「地域をえがく

 鳥取大学
Tottori University

—想像力としての地域学—



2019年 **11/24** 日

10:00～16:35 (9:30受付開始)

鳥取大学地域学部棟 5階 5160 講義室ほか

申込不要・参加無料

※参加の際に支援の必要な方は事前にご連絡ください
問合せ：鳥取大学地域学部庶務係 tel. 0857-31-5073

主催：鳥取大学地域学部

後援：鳥取県、鳥取県立図書館、新日本海新聞社
鳥取大学尚徳同窓会

基
調
講
演

「小説で街をえがく」



しばさき ともか
柴崎 友香 氏
(小説家)

1973年大阪生まれ。小説家。代表作に『きょうのできごと』(2000年:2003年に映画化)、『その街の今は』(2007年:芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞大賞、咲くやこの花賞)、『寝ても覚めても』(2010年:第32回野間文芸新人賞、2018年に映画化)、『春の庭』(2014年:第151回芥川賞)など多数。

地域学研究会第10回大会 地域課題と知のクロス

「地域をえがく—想像力としての地域学」

学部長挨拶

鳥取大学地域学部長 山根 俊喜



今年度の大会テーマは「地域をえがく—想像力としての地域学」と致しました。基調講演に小説家の柴崎友香氏をお招きする第10回目の記念大会となります。ひとりひとりの抱える切実な課題を乗り越えるための想像力。この身近な生活場面に散りばめられた想像力を、私たちはどのように見出していくことができるのでしょうか。そのとき地域はどのように理解され、えがかれることになるのでしょうか。「まちづくり」や「地域づくり」の語られる時代だからこそ、まち、ひいては地域をえがく想像力が問われてくるのだと思います。私たち地域学部は、これらの問いかけを学生・教職員のみならず、ゲストスピーカーや住民・市民の方々のお力添えと共に考えていきたいと望んでいます。多くの方のご来場を、心よりお待ちしております。

スケジュール

9:30 受付開始 (地域学部棟 5階 5160 講義室前)

10:00 開会挨拶・大会趣旨説明 (地域学部棟 5階 5160 講義室)

10:30 基調講演「小説で街をえがく」講師:柴崎友香氏(小説家)

5160 講義室

12:15 昼食

研究成果報告 地域学部棟 5階
(ポスター掲示)

13:00 シンポジウム

5160 講義室

「私と街のできごとをえがく—身近で小さな変化から」

●蛇谷りえ氏(合同会社うかぶLLC共同代表)

2012年に「うかぶLLC」を共同代表で設立し、鳥取県東伯郡湯梨浜町にて複合型の滞在スペース「たみ」、鳥取市にて「Y Pub&Hostel」を開業。その他、県内外での印刷媒体を中心としたデザイン企画および制作、アートやメディアに関するコーディネート、マネジメント業を務める。

●佐藤紘一氏(鳥取県立図書館郷土資料課学芸員)

鳥取県立図書館にてデジタルアーカイブズの制作に取り組む。近年は鳥取県が舞台となった文芸作品の蒐集のみならず、文学テキストを風景写真とともにパンフレット化する事業に携わる。2019年度は『とっとり文学の情景—地域を見つめる旅』をテーマにした資料展と講演会の開催に取り組む。

●福田修三氏(株式会社インテリアフクタ会長)

「鳥取の台所」である鹿野街道筋中央の商家に生まれ、1959(昭和34)年に家業の福田ゴザ店を継承。1977(昭和52)年「インテリアフクタ」代表取締役就任し、創業120年の2013(平成25)年に社長を交代。その後、『鹿野街道筋物語』(2015年)、『因幡国2000年よもやま話』(2019年)などを次世代への歴史物語として編纂。

●佐々木孝文氏(鳥取市教育委員会文化財課)

同志社大学大学院文学研究科日本文化史学専攻修了(文化史学)。鳥取市歴史博物館学芸員を経て、2006(平成18)年より現職。近世・近代の文学や地方都市の都市計画などを素材に、社会史に関する論考を発表している。

15:10 休憩

15:20 質疑応答

5160 講義室

16:30 総括コメント・閉会挨拶

16:35 閉会

会場へのアクセス



鳥取大学

地域学部棟 5階 5160講義室
〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101

●お車で越しの場合は、第1駐車場をご利用ください。受付時にサービス券を発行しますので、駐車券を会場までご持参ください。

2019年

11/24日



申込不要・参加無料

問合せ：鳥取大学地域学部庶務係
tel. 0857-31-5073

※参加の際に支援の必要な方は
事前にご連絡ください